Community Social worker's Book

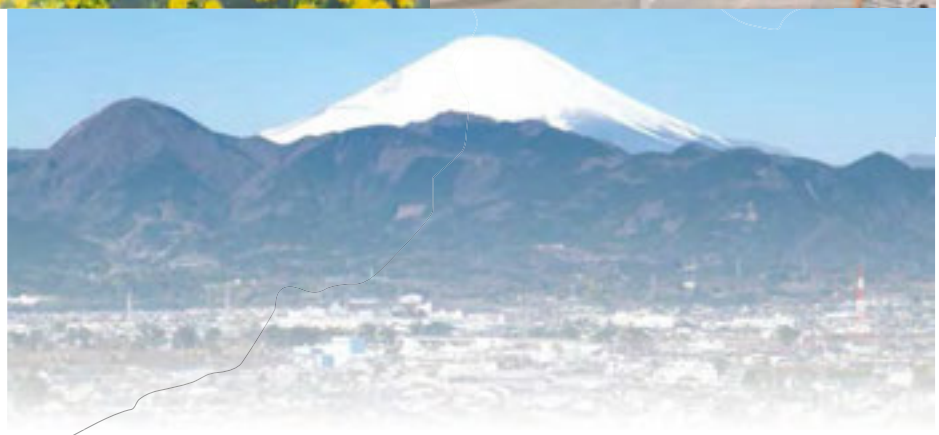
コミュニティソーシャルワーカーのための

アセスメント

assessment

足柄上郡大井町

大井町は、神奈川県の西部、足柄上郡の東部に位置し、東京都心から約70kmの距離にあります。町の東西を東名高速道路が走り、西の平坦部と東の丘陵部によって構成されています。年間を通じて寒暖の差が少なく、住環境に適し、各種作物の栽培も行われています。古くは「大井の庄」と呼ばれ、太陽と水と緑が調和した豊かな自然環境に恵まれています。



すいっぴー

contents

04 01 巻頭対談
社会福祉協議会の
ソーシャルワーク実践に向けた協働事業
地域の未来につなげる住民主体のアセスメントを実施して

10 02 はじめに
今日、求められる
コミュニティソーシャルワークを目指して

12 03 4者で取り組む
今日の地域福祉を推進する
コミュニティソーシャルワークを拓くために！
地域の未来につなげる住民主体のアセスメントを実施して

14 04 大和市社協の実践
アセスメントロードマップ
大和市鶴間地区

16 05 「鶴街つくフォーラム」の軌跡
～奇跡が輝石になるまで～
大和市社会福祉協議会　佐川 博之

18 06 ピカッと光る 佐川ワーカーのシゴト
地域の人の笑顔が好きだから、
考えます！行動します！頑張ってます！

20 07 市民ワーカーたちの底ヂカラ
THE 鶴間

鶴間

大和市　yamato

ヤマトン

大和市鶴間地区

大和市は神奈川県のほぼ中央部に位置し、都心から40㎞圏内にあります。市域は南北に細長く、丘陵起伏がほとんどありません。鉄道は市の中心部を東西に相模鉄道本線、南北に小田急江ノ島線が走り、北部には東急田園都市線が乗り入れ、市域に8駅があります。また、道路網も国道16号、246号および467号のほか県道4線が縦横に走り、東名高速道路横浜町田インターチェンジや海老名ジャンクションにも近いなど、交通の利便性に恵まれています。

22 08 地域アセスメントは コミュニティソーシャルワーク推進の土台
伴走支援アドバイザー
聖徳大学・聖徳大学短期大学部　心理福祉学部
准教授　豊田 宗裕氏

24 09 大井町社協の実践
アセスメントロードマップ
足柄上郡大井町

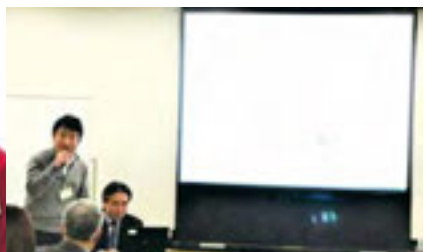
26 10 ふくし力増強へ向けた軌跡
～夢おおい未来はふくしでまちづくり～
大井町社会福祉協議会　矢野 慎一

28 11 ピカッと光る 矢野ワーカーのシゴト
人のため地域のために役立ちたい！
チカラを合わせて実現を目指します！

30 12 市民ワーカーたちの底ヂカラ
THE 大井町

32 13 地域福祉推進を活性化させる 主体性と連帯性の高い地域風土
伴走支援アドバイザー
田園調布学園大学　人間福祉学部 講師
小平 隆雄氏

34 14 協働事業の終わりに
1年間協働したことで導き出したことは



01

巻頭対談

社会福祉協議会のソーシャルワーク実践に向けた協働事業

地域の未来につなげる住民主体のアセスメントを実施して

「ほっと？もっと？！」

佐塚　お疲れさまでした。一年がかりの事業でしたが、今、どんなお気持ちですか？

矢野　ほっとしてます（笑）でも、「あっという間」だったような気もするんです。事業を終えて、今、「社協らしい仕事ができたなあ」って思っています。この事業の初めに、コアメンバーの皆さんとアセスメントの研修を受けたのですが、その時に佐塚さんが地域福祉推進に必要なこととして「共通の目的・共通の意欲…」が必要という話をされましたよね。まさにそれを、住民や関係者の方たちと共有できたと感じています。

しかも、大先輩の大和市社会福祉協議会（以下、大和市社協）の佐川さんともご一緒できたし、県社協やよこはま地域福祉研究センター（以下、研究センター）の皆さんとも一緒に仕事ができて、楽しかったし心強かった。

佐川　私の場合は、第5次大和市社協地域福祉活動計画に地域アセスメントの実践があって、県社協からこの事業の打診があったときは、正直「ラッキー！」って思ったんです。でも、次の瞬間、「また大和市か？」とも思いました（笑）。県域の責任が生じるわけで、「ホントにできるの？」って不安も押し寄せてきた。でも、終わってみると、達成感と安堵感でいっぱいです。私だけじゃなく、他の社協スタッフも、この事業に関わったコアメンバーも皆が同じ気持ちだと思います。

ギブ・アンド・テイクからウィン・ウィンへ

佐塚　本事業は県社協が発案して実現しましたが、どのような経緯で事業提案をされたのでしょうか？

小林　研究センターさんに初めに相談させていただいたのは、平成27年の5月でしたね。県社協の取り組みとしては、平成25年5月に『社協によるコミュニティワーク実践に向けた提案集【普及版】』を作成して、県内全市町村社協ワーカーに配布しました。また、個別支援と地域づくりの機能を融合させた、『社協における総合相談支援』に向けたプロジェクトを設置して、平成26年3月には、『かながわの社協からの提案2014 ～住民が抱える生活課題の解決に向けて～』を発行するなど、県内社協の『総合相談支援』の後押しを市町村社協と協働で進めてきました。

制度としても生活困窮者自立支援法の施行や介護保険法及び社会福祉法の改正等、制度の持続可能性に配慮しつつ、必要な人に適切に提供される仕組みを地域で創る方向に進んでいます。

こうした流れの中、県社協では、これまでの積み重ねを踏まえて、あらためて住民を主役として、複雑多様化する生活に困難を抱える人を全世代的に捉えて発見・対応できるよう、小地域での住民の主体的活動や社会資源を活用したアセスメントの実践モデルを創出して県域の市町村社協に参考にしてもらえないかと考えたのです。

佐塚　そうでしたね。【普及版】制作時はお手伝いをさせて頂きました。

小林　研究センターには【普及版】をとりまとめていただいた際のつながりもあると聞いています。

県社協と市町村社協で事業を行うのではなく、第三者的な地域福祉の推進を考える機関にも入ってもらい、社協だ

佐川　博之　HIROYUKI sagawa

明治学院大学　社会学部社会福祉学科卒
社会福祉士・介護支援専門員
大学での専攻は児童福祉論。卒論執筆時、社協職員に出会い地域福祉に関心を持ち大和市社協に入職。地域活動係、援護係、総務課長、まごころセンター課長等を経て、現在、ボランティア振興課長。

〈モットー〉「すべての社協活動は模倣から始まる」
しかし、オリジナリティを入れ、遊び心を加えて初めて自分自身の社協活動になる。経理業務だって、目指せ！コミュニティ・経理ワーカーなのだ。

矢野　慎一　SHINICHI yano

神奈川大学　経営学部卒
介護支援専門員・今後社会福祉士資格取得を計画中。
大学卒業後、事務機器販売会社で３年間勤務。
人の役に立てる仕事に就きたいという想いで大井町社協に入職。現在、14 年目。

〈モットー〉「人の話を聞くこと」
何事もまず聞いてきて、一度飲み込んでから考えていくというタイプなんです。

からこその地域との向き合い方、効果的なアセスメントの実践方法、次の取り組みの模索等を客観的な視点をもって一緒に考えていただけないかと相談に伺ったのです。

佐塚　私たちは、地域福祉の今・未来を様々な視点で調査研究したり、実践活動の開発や支援をしようとしている団体です。一方、社協については、今日の社会で、大きな役割と責任を持った、他に代わりのない機関だと思っています。だから、県社協が相談にみえたとき、「もっと、市町村社協が元気になるように、成果を実感できるような取り組みができるよう県社協は応援したいのです」と聞いて、是非、私たちも一緒に考え、応援させて頂きたいと思いました。

佐川　なるほど。改めてそういうことだったのですね（笑）。市町村社協も機能分化していて、それぞれが自分の業務で手いっぱい。社協が進めるべき地域福祉推進等の大きなラウンドのヘルプを外部に求める発想が湧かないのかもしれないですね。過去には、県社協に大和市担当の職員がいて、事業の進め方や職員としての動き方も相談し合っていましたが、今は、県社協の職員数も減っているし、そういう支援も少なくなっていますよね。

小林　大和市担当、大井町担当などの職員配置があったころの３分の１に職員は減っているでしょうか。協働することが少なくなって、県社協も市町村社協の状況がつかみにくくなってもいると思います。

佐川　職員数については、市町村社協も、福祉サービス事業部門の職員数は増えていますが、地域福祉を担当する職員が増えているとは限らない。

矢野　僕は、この 10 年、日常生活自立支援事業と生活福祉資金貸付事業の担当を続けていますが、この協働を行ってみて、本来の社協らしい仕事というか、地域福祉に直に関わる仕事の経験がこれまで薄かったことに気づきました。

佐塚　地域福祉の重要性は高まっているのに、地域福祉の仕事をする体制は弱まっている。県社協にも市町村社協にもジレンマみたいなものが生じているのでしょうか。

今回の事業では、４者協働だからこその事業の成果もあったと思いますが、悩みを共有したり、アドバイスをし合ったりする場面が多かったですよね。４者それぞれの強みも発揮し、互いに認め合うこともできたと思います。

研究センターは、事業の全体を企画構成し、会議や研修では、ファシリテーターや講師も務めさせて頂きました。また、研究センター職員２名は、２つの社協それぞれアセスメント伴走支援メンバーとして、社協ワーカーの取り組みの記録をするとともに、プロセスや研究者の調整などをしました。本当に良い勉強の機会になったと思っています。

社協ならではのコミュニティソーシャルワークとは

佐塚　さて、今日の**社協のコミュニティソーシャルワークの使命**は、どんなことだと思いますか？

佐川　地域支援と個別支援のバランスの中で業務展開することが、社協組織として重要だと思うんです。

私は、大学で児童福祉を専攻していて、就職も児童養護施設希望でした。卒論は「子どもの成長を地域で支える組織の悩み」がテーマで、この時、調査協力してくれたのが社協だったんです。そこから、社協に関心を持つようにな

小林　幸子　SACHIKO kobayashi

神奈川県立保健福祉大学　保健福祉学部
社会福祉学科
社会福祉士・精神保健福祉士
神奈川県社協入職 10 年目。
福祉人材研修部、地域福祉部、福祉サービス推進部を経て、現在、地域福祉推進部地域福祉推進担当

〈モットー〉当事者の声を聴く

佐塚　玲子　REIKO satsuka

慶応義塾大学卒
神奈川県立保健福祉大学大学院修了
横浜市地域ケアプラザ、認定 NPO 市民セクターよこはまの勤務経験を経て平成 25 年 NPO 法人よこはま地域福祉研究センターを設立。人と社会への関心を原動力に中間支援団体として、地域福祉推進を目指しています。

〈モットー〉「観る・聴く・読む・書く・話す」のバランスを大事に元気に働くおばちゃんでいること

り進路も変わったんです。

社協には、多くの機能があって、様々な業務を経験できます。私は、在宅介護支援センターの相談員として個別支援どっぷりだった時期もあるし、地区社協担当として、今でいう生活支援サービスの立ち上げもしました。そのほか、デイサービスや子育て支援センターの管理者などいろいろ経験した今、やっと“社会や福祉がわかりかけてきた”んじゃないかと思っています。

社協の強みは、子どもから高齢者まで幅広い領域を受け持つし、生活課題を抱える住民から、活動を進める関係者や専門職まで、実に様々な人たちとの関係性の中で業務が展開されています。その強みを活かせてこそ、社協のコミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）だと思います。

矢野　僕は、平成12年、25歳の時、民間企業を辞めて社協に入職しました。企業を辞めたのは「人のためになる仕事がしたい」と思ったから。入職して、総務経理、団体事務、福祉サービス事業等々、いろいろ経験させてもらいました。でも、正職員3名の職場だから、3人で仕事をローテーションしているとも言えますが。（笑）

平成17年からは、小地域福祉の担当になって、社協広報、会費事務、生活福祉資金、日常生活自立支援事業などを担うと共に在宅福祉サービス推進委員会も担当したんです。

この時、小地域福祉の担当職としての仕事のそれぞれに厚みをもたせていれば、住民主体の生活支援サービスの創出や住民の組織化ができたと思います。でも、当時、そこまでできませんでした。地域のために何ができるか、いつも葛藤していたけど、組織の中でも、地域福祉推進のためのノウハウを確立できていなかったと思うし、近隣社協も同じような状況で、あえて関係して現状を打開するということにはならなかったのだと思います。

佐塚　本事業はアセスメントを主軸にしたコミュニティソーシャルワーク実践をしたのですが、改めて、アセスメントに社協としてどのように向き合う必要があるのでしょう？

佐川　社協ワーカーの多くは、漠然とは、地域をつかんでいると思うんです。だからこそ「多分こうなんだろう」っていう「地域わかった感」に陥ってしまうことに注意したいですね。それに、忙しい毎日のなかで「アセスメントしなくても大丈夫」になっちゃうこと。それでは、社協が、住民を置き去りにしたままで、地域課題に取り組むことになってしまうと思うんです。

小林　県社協がこの事業を発想したのは、今、大井町社協の事務局長の野地さんが県社協にいらした時。

野地さんは、住民とともにするアセスメントにこだわっていました。住民主体の地域福祉を展開していくには、CSWが、**住民と共にアセスメント**をしなくてはならないと考えられていたんだと思います。

矢野　きっとそうです（笑）。

佐川　そういう意味では、社協組織の中に、または外部から、社協ワーカー達の背中を押すような導きが必要かもしれませんね。我がボランティアセンターの大矢所長は行政にいた人で、健康福祉部長もされていた方ですが、上から目線ではなく私の仕事をみていてくれています。組織として、事業をどのように効果的に行うか側面的に支援してもらっています。ミニシンポジウムが終わって間もなく、『鶴街っくフォーラムの今後』っていう資料を作成してくれて、「こんなの作ってみたよ・・・佐川が気に入るかわからないけど」って、さりげなく出された時には、うれしい驚きでした（笑）。

佐塚　CSWとしての皆さんを応援してくれる上司がいたのですね。

佐川　もうひとつは、外部から研究センターが加わってもらったことで、適度な緊張感や連帯性を生み、皆が、自分の持っているチカラを発揮して、役割を果たすことができたのかもしれません。住民の皆さんの存在も含め、社協だけではなく、外部との協働によって、みられている感とか、認められる感みたいなこと、実は大事だったりするんじゃないかと思いました。

アセスメント結果からどんなことが見えてきた？

佐塚　アセスメント結果からどんなことが見えてきましたか？たくさんあったと思うので、3つずつあげてください。

佐川　①無縁社会の顕在化　②放置しておけない複合的な困りごとのある人の増加　③何となく知っているけれど、互いの活動を理解するまでに至っていない地域関係者。

アンケート調査結果の、世帯構成を改めてみると、独居と高齢夫婦世帯が全体の６割。しかも、近隣に親族や頼れる人間関係のない人が多いことには改めて驚きました。

複合的な困りごとのある人や世帯の存在についても、よく聞くようになっていたけれど、実際どんな複合性なのか、地域をよく知るコアメンバーですら、実はピンときてなかったと思うんです。

ミニシンポジウムで佐塚さんがダブルケアの話をしてくれましたが、「子育てと介護等を同時にしている人、地域にいるなあ、大変だろうなあ」っていう実感が持てたことも成果だと思います。

また、コアメンバー会議を続けてきて、長年民生委員をされている方でも、行政内部の事務分担を把握しきれていないことがわかったり、子育て支援関係者がお互いを知らなかったりしましたが、アセスメントによって確認できたり、顔の見える関係ができたのは大きな成果です。

矢野　①求められている地域のつなぎ役　②一人一人の住民の困りごとの多様性　③アセスメント結果の活用と地域福祉推進に対する意欲の高まり。

今回のアンケートは全戸調査だったが、回収率もよく、自由記述も予想以上にたくさん頂き様々なことが見えてきました。大井町は利便性が高い地域ではないから、やはり移動の問題は大きかったし、今、まだ何とかなってるけど、この先の不安を感じている人は多いことが見えてきました。

ゴミ出し一つとっても、ゴミ出しができないっていう悩みも、ごみ集積所が遠いっていう悩みもある。解決の方法が違う課題が様々見えてきました。

子どもの問題も、核家族じゃなくて、ゆったり３世代同居家庭がある一方、回答をくれた子どものいる世帯の30% 以上が、預けられるところがないと答えていて、地域で子どもを支える仕組みの必要性を感じました。

これらのことは、選択式回答だけではなくて、自由記述欄への記述が多かったことによって分かったことで、アセスメントに関わったメンバーたちは、課題解決に取り組んでいかなければという想いがとても強くなっています。

伴走チームとしては２人のCSW、２つのアセスメントをどう見た？

佐塚　県社協や研究センターも双方の社協のアセスメントに伴走チームとして参加しましたが、どんな感想をもちましたか？

小林　双方の社協にいえることですが、小さなエリアでも、見えていないことがあり、アセスメントは大変有効だと感じました。

大和市では、経験豊かな民生委員さんが、地域課題は包括的に理解しているつもりだった。でも、子どもについてのフォーカス・グループ・インタビューにオブザーバー参加されて、初めて聞く話がたくさんあって、積極的に子育て支援の方々と繋がりを持とうとされて、アセスメントのチカラを感じました。

また、大井町は、あれだけ土地があるのに「公園がない」という課題が上がったり、お祭りが盛んで、町民の多くが参加していると回答しているのに、人が集う貴重な場であるという認識が薄かったり、アセスメントって、地域や住民によって異なるんだなあと思いました。どちらの地域でも「住民パワー」の凄さを実感させてもらいました。

佐塚　研究センターの伴走支援担当職員は、矢野さん、佐川さん、二人のCSWとしての異なる個性がアセスメントチームに反映されチームが育っていくのを目の当たりにしたと言っています。

佐川さんは、ベテランでコミュニティワークのスキルもたくさん持っていらっしゃる。アセスメントを行う地域やコアメンバーの設定は、今後、更に市内全域に取り組みが広がることを視野にいれて考えられていました。また、事業の過程で、一部の社協ワーカーやコアメンバーの取り組みにならないよう、『鶴のおんがえし通信』の発行、ミニシンポジウムの開催等されています。

優れているのは計画性だけではなく、メンバーの状況をよく観察し、作業負担を重くしないなどの配慮もされています。住民からの信頼が厚い CSW です。

一方、大井町は、野地事務局長や小川さんも本事業を支えていましたが、矢野さんの個性がチームに影響を与えて

いたと思います。チーム結成時、コアメンバーの人数が多くて、情報の共有やチームの結束など心配しましたが、アセスメントに関する分析を行う会議の席上、全てのメンバーが、結果や、今後の取り組みについて熱く語る姿に感動しました。このような成果に導いたのは、アンケート回答入力作業をコアメンバーの皆さん自身行ったことによるものだと思います。表現が適切じゃないかもしれないけど、矢野さんが、自分では気づかれていないかもしれない「ほっておけなさ」が、いつの間にか地域の人を動かしているような気がします。

コアメンバーさんにとって、「自分たちのアセスメント」という意識が強くなっているのを感じました。また、事業全体を通じて、矢野さんの誠実さや、丁寧な気遣いが地域の方に伝わって、取り組みのモチベーションが保てたのかもしれないとも思います。

事業の中で、社協ワーカーとしてのチカラは発揮できた？

佐塚　コミュニティワーカーのチカラを 25 年発行の提案集ではこんな風に整理していますが、お二人はチカラを発揮できましたか？

① 個別ニーズを活動の出発点としてコミュニティワークを展開するチカラ
② ニーズをキャッチしたら組織で解決に導くチカラ
③ 地域の情報・資源・特性について正確に把握するチカラ
④ ニーズや課題に応じた住民主体の活動を展開するチカラ
⑤ 社協ワーカーのスキル情報を共有し社協組織としてソーシャルワーク機能を果たすチカラ

『社協によるコミュニティワーク実践に向けた提案集【普及版】』（平成 25 年 5 月神奈川県社協発行）より抜粋

佐川　事業が終わってみて、これから自分がチカラを発揮していかねばと思うのは⑤ですね。

社協の一人一人の職員が持つスキルや情報をもっと共有すれば、より良い仕事ができると思います。アセスメントについて興味を示す関係者なども出てきて、知りたいと思う人や組織にきちんと情報を伝えるための手法としてミニシンポジウムを実施したんです。

『鶴のおんがえし通信』という新聞も同様で、新聞を作るスキルというより、どうしたらコアメンバーに事業の楽しさを知ってもらい、主体的にかかわっていただけるか私なりに考えた形を、他の職員に見せる取り組みでもありました。伝えられたかどうかは疑問ですけど（笑）。

矢野　僕は、個別支援の経験のないワーカー。だからこそ、①個別のニーズを活動の出発点にするチカラは、アセスメントの結果から、まぎれもない個別のニーズを得たので、ここでチカラをつけられたと思っています。

②ニーズをキャッチしたら組織で解決に導くチカラについても、今回のアセスメントで、今までだったら介護保険事業を行っている他部署に伝えなかったであろうことを、伝える必要性を認識しました。ケアマネも包括も、困っている人の様々を知ること、また、その困りごとに社協としてなにができるのか考える意味でも、ともかく情報の共有やコミュニケーションに努めることが必要です。僕としては、この 10 か月の協働事業は、長い実践的研修だったと感じています。

県内市町村社協 CSW の皆さんへ

佐塚　最後にアセスメントについて、他の市町村社協にも勧めますか？

佐川　私は、社協に入職して 2 年目に地区担当になって、その時、今回と同じようなアセスメントをした記憶があるんですよ。でも、出た結果を、個別支援や地域支援につなげるといった総合的な視点を持っていなくて、「とにかく地区社協の取り組みを考えなくちゃ」みたいな考え方しかなかった。もしかしたら、多くの社協で、様々なアセスメントは行っているんじゃないかと思うんですよ。でも、社協ワーカーだけでそれを行ったり、結果をオープンにしないのでは、せっかくのアセスメントが意味を持たなくなる、ということなんです。

住民と共に、計画的に行うことが大事だということを、あらためて再認識しました。

矢野　本当にそう思います。

僕も平成 17 年に在宅福祉サービス推進委員会で、アセスメントを行ったけど、目標の設定や計画性が弱かったので、その後にうまく活かすことができなかった。

小林　今回は、住民参加というより、住民主体でアセスメントを行った事業になりましたよね。

アセスメント後、すぐにみえてきた結果から取り組みに繋げようとする意識がとても自然にメンバーの中に生まれていることに価値を感じました。

佐塚　本当ですね。但し、CSWのマネジメント力も必要です。プロセスマネジメント・リレーションマネジメント・タスクマネジメントの3つを、ワーカーが常に意識していることが大事だと思うのです。

10か月の事業でしたが、大きなスケジュールを定め、進行管理のなかで柔軟な調整をしていく。

事業に関わる人も徐々に増え、アセスメント結果が出るころには、取り組みを生み出すために、更にネットワークも広げなければならない。そのためには、グループダイナミクスを意識したリレーションマネジメントも大切です。そして、タスク（成果）にこだわることも重要です。

成果が明確にならない取り組みは、次の段階へ取り組みを進める意欲を薄れさせます。
共通の目的と意欲を持ちながら、住民とワーカーが、互いに認め合って取り組む。こういう状況を作り出すことがCSWの重要な仕事ですね。

協働の勧め「一人じゃないって素敵なことね♪」

佐塚　4者の話し合いも終わりと思うと寂しいですね。皆さんから、メッセージ頂けますか？

佐川　地域福祉をテーマに市町村社協と県社協が、一年という期間、濃密に協働することはなかなか実現できないですよね。それができて良かった。互いを知り、自分が持っているノウハウを伝えたり伝えられたりすることで、仕事へのモチベーションがあがり、正直とても楽しかったですね。

研究センターと協働できたこと、これもまた大きかった。県社協と市町村社協をつないで、事業全体を前に進めてくれていたと思います。

事業の過程で、計画の妥当性は？進行管理は？マネジメント力は？いろいろ悩むとき、研究センターの福田さんが、時に優しく、時にかなり厳しく（笑）、いつしか自分がいじられキャラだったのか？と思うくらいに、共に取り組んでくれたことは、新鮮な体験だったと感じています。いつの間にか、私の仕事の在り方を的確に捉えて記録されていて、アドバイスいただけたことは助かりました。

矢野　こんなにタイトなスケジュールだったのに、できた！しかも、アセスメント結果も、アセスメントを行ったからこその人と人との関係もできた。成果を残すことができたし、久しぶりに達成感を感じる仕事ができたと思う。

市町村社協、単独ではなく、時に近隣の社協と協働したり、県社協と協働したり、研究センターさんのような地域福祉を志す団体と協働したりすることは、初めてだったけれど、知識や情報を得たり、CSWとしてのスキルを学んだり刺激になることがどれだけあったことか。伴走支援をしてくださった、小平先生にも本当に感謝しています。是非、県域の市町村社協の職員の皆さんにも気づき実行してほしいです。

地域福祉は、社協の中だけで完結せず、外に開いて、知識や情報だけじゃなく、豊かな関係性があってこそ、育っていくんじゃないかと思います。

小林　私も、発案した当事者でありながら、想定以上の達成感を感じることができました。

事業の報告でありがちなのは、実施した会議の羅列。この事業は違います。地域の福祉推進のために、何ができたのか。そして、今後にどうつなげていくのかという成果が明確です。報告会で、大和市も大井町も、コアメンバーさんたちが、自分の言葉で把握した地域を語りこれからの取り組みを主体的に生き生きと話された。これには、本当に感動しました。

タイトなスケジュールの中で、4者会議も、アセスメント全体研修も行い、そのうえでの各社協でのアセスメント実践、そして報告会です。事業に関わった人は、両社協・県社協・研究センターに地域住民の方々も含めて、50名程度でしょうか。最後まで、目的を共有して、意欲をもって、助け合って事業を終えることができて本当に良かった。この住民同士、社協ワーカー同士のつながりは、今後にも活かされることと思います。他機関とともに事業を行うことは社協ワーカーのモチベーションを保つ意味でも重要だと皆さんも話されていましたが、私も、研究センターの皆さんと、いろいろ対話しながらの仕事は、楽しかったです。

佐塚　ありがとうございました。私たちも本当に良い経験をさせて頂きました。県域の社協ワーカーの方々と、この事業をきっかけに、新しいつながりができるといいなあと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

02 はじめに

今日、求められるコミュニティソーシャルワークを目指して

社協ワーカーが行う「人づくり」「活動づくり」そして「地域づくり」を拓く！

「コミュニティソーシャルワーク実践に向けた協働事業」は、2つのモデル社協のコミュニティソーシャルワーク実践を通して、今日のコミュニティソーシャルワークの在り方を検証すると共に、一層必要性を高めている、地域福祉の総合的展開、ー人づくり・活動づくり・地域づくりーをどのような具体的アプローチで進めていくのか探求するために実施しました。

また本誌は、この取り組みを県域のすべての社協ワーカーにご覧いただき、更に、検証や探求が進み、より効果的なコミュニティソーシャルワーク実践の広がりにつながることを願って作成しました。

本事業の実施が決定した背景

地域福祉の転換期

近年、生活困窮者自立支援法の施行や介護保険法及び社会福祉法の改正、「我が事・丸ごと」地域共生社会の実現に向けた関連事業の推進等の諸制度・政策は、今後、より地域の福祉力を必要とする方向に進んでいます。「高齢者だけ」「障害者だけ」ではなく、すべての地域住民が、一人一人の生きがいを持ちつつ、主体的に「地域づくり」に参画していくことが求められ、それを促進するワーカーの仕事の重要性も増しています。

社協ワーカーに求められること

このような転換期の中、社協ワーカーはコミュニティソーシャルワーカー（CSW）として、住民主体による、地域福祉の総合的な展開、ー人づくり・活動づくり・地域づくりーにチカラを発揮することが求められます。

このために、「社協によるコミュニティワーク実践に向けた提案集【普及版】」（平成25年発行）では、社協ワーカーが直ちに行うべき3つの提案と、それを具体的に進めるために社協ワーカーに身に付けてほしい5つのチカラを示しています。

行うべき

3つの提案 PROPOSAL

01 社協ワーカー、一人ひとりの専門性・スキルのベースアップを図る

地域を基盤としたソーシャルワークのプロセスの理解と実践意識の向上

- 社協ワーカー、一人ひとりが、地域福祉推進の重要性と社協の役割を理解する。
- ニーズの把握→アセスメント→計画→実践→評価→改善といった、ソーシャルワークの一連のプロセスの理解と実践力を高める。

02 地域福祉推進を進めるには、まず「地域診断」

住民主体の活動づくりを計画的に進めるための手法の習得

地域を知ろう
- 社協ワーカーが地域を知ることの必要性・目的・意義・方法を理解する。
- 地域を知るということは何を知る必要があるのか…その要素を理解し、正確な把握をする。

地域へのアプローチ手法としての地域診断を身につけよう！
- 地域のニーズや課題に応じた住民主体の活動展開を円滑に行うため、働きかけるエリアを定め、そこに住む住民と協働した地域診断を実践する手法を身につける。

03 地域福祉推進に向け、効果的な事業展開が図れるよう

組織的な知の創造・蓄積・共有を図っていく

ニーズ・情報・スキルの組織内での共有化を図ろう！
- 個別支援担当と地域支援担当の連携をはじめ、地域の情報や職員のスキル、知識、経験を組織の財産として共有する意識の定着を図ろう。

各業務の意義や目的をそれぞれが認識して業務に向かう体制づくりを！
- 地区担当制、業務記録の蓄積、定期的なカンファレンス、スーパービジョンの定着など、組織的な知を高めていく協働体制をつくろう。

身につけて欲しい

５つのチカラ　POWER

01 個別ニーズを活動の出発点として コミュニティワークを展開するチカラ

02 ニーズをキャッチしたら、組織で 解決に導くチカラ

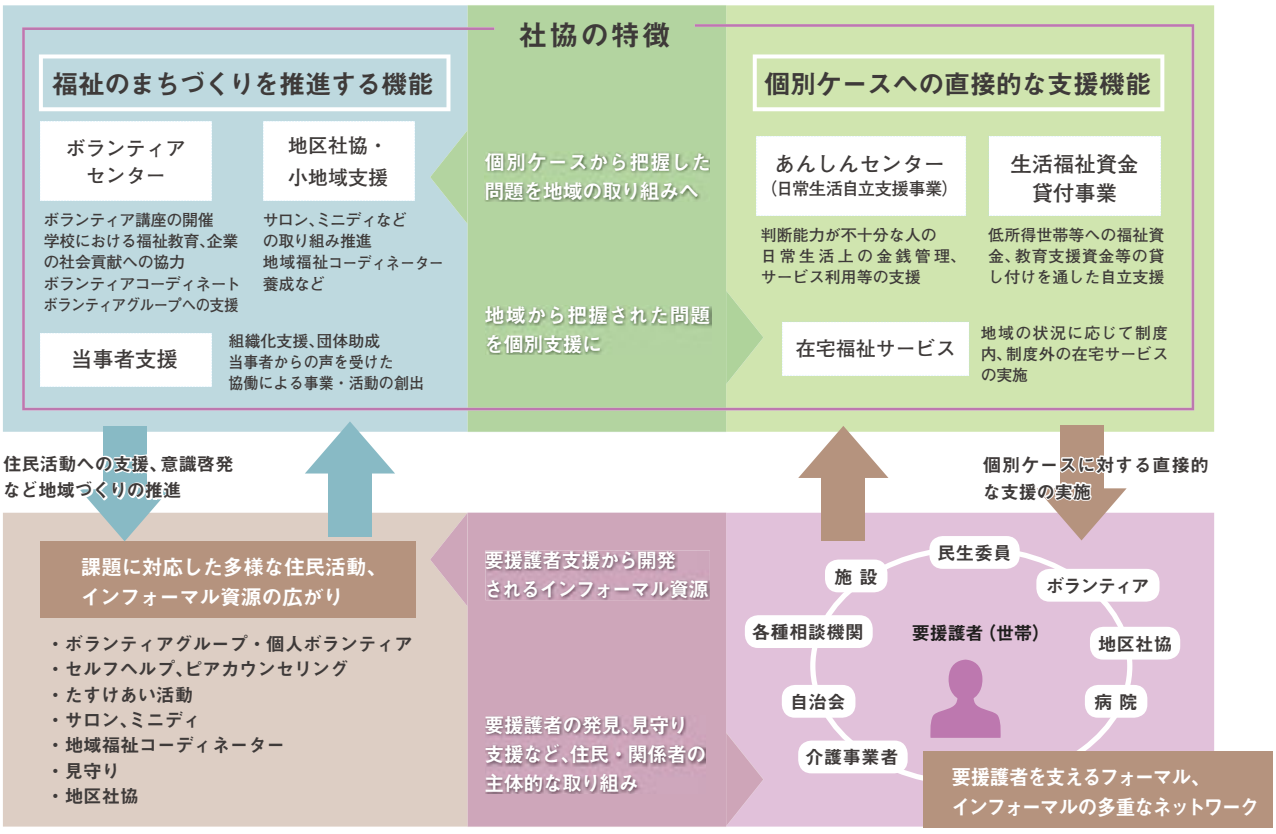
03 地域の情報・資源・特性について 正確に把握するチカラ

04 ニーズや課題に応じた 住民主体の活動を展開するチカラ

05 社協ワーカーのスキル・情報を共有し、 社協組織として ソーシャルワーク機能を果たすチカラ

社会福祉協議会（社協）とは　～社協が行うコミュニティソーシャルワークの特性は？～

市区町村社協は、地域住民の組織化を行うことを通じて、住民の福祉課題解決に取り組むために設置された組織であり、「個別ケースへの直接的支援機能」と「福祉のまちづくり推進機能」を連動させて動かすことで、多様に分かれている事業を統合化し、ダイナミクスを活かして地域福祉の総合的展開を図るところに社協の特性があります。



「かながわの社協からの提案 2014 ～住民が抱える生活課題の解決に向けて～」より抜粋して加工

この地域福祉の総合的な展開を行っていくために、地域を基盤としたコミュニティワーク（注）を実践していくことが、コミュニティソーシャルワークです。

協働事業の全容、また２人の社協ワーカーがどのようにチカラを発揮し、コミュニティソーシャルワークを行ったのか、是非、ご一読ください。

（注）コミュニティワーク

ソーシャルワーク（社会福祉援助技術）の一つで、ケースワークやグループワークなどの直接援助技術に対して、地域社会に共通する福祉ニーズや課題の解決を図るために、地域診断・社会サービスの開発・地域組織のコーディネート・機関や組織の連絡調整など、住民組織や専門機関などの活動を支援する間接的な援助技術のこと。（社協によるコミュニティワーク実践に向けた提案集【普及版】より抜粋）

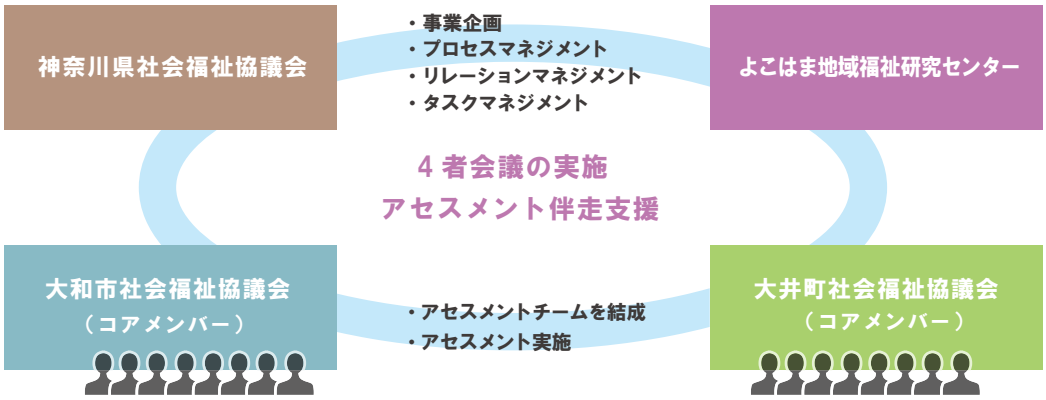
03

4者で取り組む

今日の地域福祉を推進するコミュニティソーシャルワークを拓くために！

コミュニティソーシャルワーク実践に向けた協働事業

本事業は、神奈川県社会福祉協議会と特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター、大和市社会福祉協議会、大井町社会福祉協議会の**4者協働**で実施しました。



事業の目的 PURPOSE

01 効果的実践から探る

ソーシャルキャピタルを活用したアセスメントを主軸としたコミュニティソーシャルワークの効果的実践を２つの社会福祉協議会（以後、社協）の実践から探る。

02 協働の成果を探る

県社協、市町村社協、更にNPOの持つ力を出し合い、協働の価値や地域福祉実践のあり方を探る。

03 CSWの実践を考える

本事業のプロセスと成果を可視化し、（冊子として制作）、『「人づくり」「活動づくり」からの「地域づくり」を目指す』コミュニティソーシャルワーク実践を県内社協全体で模索することに繋げる。

実施の５つのステップ STEP

STEP 01 4者会議の結成 （平成27年度中）

開催目的：事業全体・途中経過の共有／相互相談／課題解決

- **事業の枠組み企画** — アセスメント全体研修・伴走支援プログラム・全体報告会・報告書作成
- **モデル社協を決定** — 大和市社協・大井町社協
- **4者会議の実施**
  - （1）事業の趣旨と全体像の検討と共有
  - （2）２つの社協についてコミュニティソーシャルワーカー（以下、CSW）が把握する地域の理解
  - （3）事業スケジュールの確認
- **準備会実施（コアメンバー会議）**
  - （1）事業期間に連携・協働の輪を広げることを念頭にコアのメンバーを選出・打診
  - （2）各市町村社協の現状（地域概要・活動計画・市民活動の状況・認識している地域課題）共有
  - （3）アセスメント実践の準備（アセスメント目的とエリアの決定・アセスメントチームの結成）
  - （4）今後のスケジュールの確認＝主に全体研修会のお知らせ

STEP 02 アセスメントを理解する研修実施

会場：1、2日目　かながわ県民サポートセンター
3日目　海老名市立総合福祉会館

	講　義	ワークショップ	講　師
5/30（月）	社会福祉の現状と 地域福祉推進の必要性	○○地域の検証！ 地域課題の抽出とアセスメント目標の決定	よこはま地域福祉研究センター 佐塚 玲子
6/8（水）	アセスメントって何？	何を知る？ その方法の選択と分析法の検討	田園調布学園大学　人間福祉学部 心理福祉学科 講師 小平 隆雄
6/17（金）	アセスメント実践の スキルを獲得する。	グループインタビューの方法と分析法 アンケート調査の方法と分析法	

STEP 03 各市町村社協別アセスメントの実施と伴走支援

（7月～12月）

大和市・大井町社協双方に伴走支援チーム（研究者＆県社協＆研究センターワーカー）が参加し、アセスメントを段階的に進めていくこと（コアメンバー会議、作業等）を応援しました。

特にアセスメント伴走者の要として、大和市社協には豊田宗裕先生、大井町社協には、小平隆雄先生にお願いし、アセスメントのプロセスでのアドバイスを頂きました。

	目的	具体的内容
㊞ 8/25（木） ㊟ 8/23（火）	アセスメントの 目標と計画の確認	・アセスメントチームを結成 ・全体研修で得た情報をもとにアセスメント目標の設定と計画策定
㊞ 10/6（木） ㊟ 10/4（火）	アセスメントの実行 役割分担と準備	・具体的に調査する内容を決定し、アセスメント方法を選択 ・コアメンバーでアセスメント実行のための役割分担 ・調査したい内容について、方法は適切か？質問項目の種類や質問の仕方に修正の必要がないか？調査分析の方法はどのように行うかの確認
㊞ 11/29（火） ㊟ 12/20（火）	アセスメントの分析	・調査を実行して現れた結果を分析 ・想定していた状況とのギャップや改めて見えてきたことの整理 ・結果、今後、どのような取り組みが必要になるかを検討

㊞ 大和市社会福祉協議会　㊟ 大井町社会福祉協議会

STEP 04 アセスメント報告会の実施

2/14（火）　会場：かながわ県民サポートセンター

「地域を知り、取り組みにつなげる！私たちのアセスメント」

実践報告① **「夢おおい未来はふくしでまちづくり」**
～ふくし力増強に向けた大井町最強コアメンバーの軌跡～　大井町社会福祉協議会

実践報告② **「鶴街っくフォーラムの取り組み」** 大和市社会福祉協議会

パネルディスカッション **「今だから共有したい…アセスメント実践の難しさと価値」**
～メンバーの皆さんに感謝をこめて～

ワークショップ **「キャッチしたニーズや課題に応じた活動を展開するために！」**

STEP 05 協働事業　実践報告書の制作

（1月～3月）

県域社協のCSWのアセスメント実践のきっかけとなり、住民との協働や社協間での協働の広がり、コミュニティソーシャルワークへの関心の高まりを期待し、制作しました。

コンセプト　CONCEPT

県域社協ワーカーに関心を持ってもらえる報告書にする。

（1）CSWの取り組みや個性を生き生きと伝える。
（2）協働（住民、4者等）がもたらす効果や可能性を伝える。
（3）各社協のアセスメント及び、本事業全体のプロセスゴールとタスクゴールを明確に伝える。

報告書企画・編集・デザイン：NPO法人 よこはま地域福祉研究センター

4者会議

第1回　4/27
事業の趣旨、全体像の共有と検討、研修準備

第2回　7/28
研修振り返り

第3回　9/9
伴走支援準備、伴走支援アドバイザーとの情報共有

第4回　11/14
アセスメントの進捗、課題の共有

第5回　1/13
全体報告会内容の確認、報告書の企画共有・意見交換

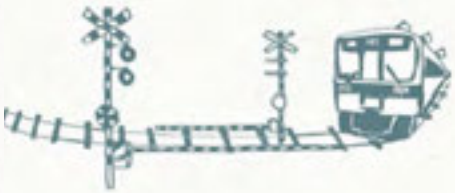
第6回　2/17
事業全体の振り返り

04

大和市社協の実践

アセスメントロードマップ

大和市鶴間地区



Stage 6 成熟期　メンバーの団結

Stage 5 混迷期・充電期・再確認期　ゲリラ豪雨が！

Stage 4 成長期　嵐に立ち向かう！

どこまでやるの？
地域包括支援センターから
不安の声。
−150

関係者から「報告がない」
と苦言される。
−200

多忙が重なり、
原因不明の
湿疹が

素敵な女性に囲まれて、
ファシリの佐川はにっこにこ。
+300

こまめに報告を重ね、
取り組みがアカデミックと
評価された！
+200

楽しくわかりやすく。
参加者の帰属感を
生む工夫は、
腕の見せどころ。

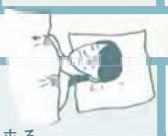
休みでも結構
気になる独居宅。
−30

あらためて地域関係
団体との調整の難しさ
を認識する。
−200

子育て支援者
グループで課題
を話し合う。
+150

「神様は乗り越えられる
試練しか与えない」と
激励され、やる気に着火。
+100

インフルで、
主力職員
ノックダウン。
−500



テレビ見て
これは使える
ネタ探し。
+80

仕事を
離れても
CSW 魂が…

団結の効果抜群
飲みにケーション。
+100

FGI※ にコアメンバーも
参加。関係者の繋がり
ができる。
+50

みんなで知恵を
出して作ろうと
いう気持ちが高まる。
+100

※FGI＝フォーカス・グループ・インタビュー

車いすに乗って買い物。
鶴間の街を
子どもが福祉体験。
+50

メンバーと意見の
相違もでてきた。
さあどうする？
−40

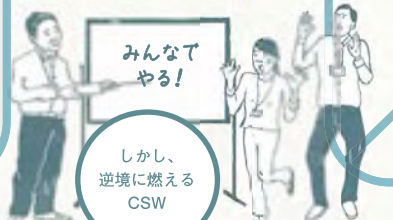
+40
こうしたい
それなら
これは？と
意見交換。

第１回会議。
困りごとや問題点
をあらいだす。
+30

さて、
何をやらされるの、
と戸惑うメンバー
たち
−200

問題がみえたら
積極的に市民に伝えたい。
+60

2チームでの分担作業
を提案。コアメンバー
も納得する。
+50



しかし、
逆境に燃える
CSW

自治会長、民生委員に
アンケートを依頼する。
+20

「鶴のおんがえし通信」
を回覧すれば
見える化に。
+100

社会資源どこにある
のか出してみよう。
+30

各職員にも作業と責任
が徐々に押し寄せる。
−150

コアメンバーに楽しさを
感じてほしい！
と小ネタやグッズを考案。
+30

慌ただしく、
矢継ぎ早に研修が…。
安請け合いを再び後悔。
−10

テーマは省エネ＆
効率化！地域は
鶴間に決定。
+100

佐川は、
見た。

地域は人生経験
の宝庫。
「まだ若いんだから！」
と言われることも。

お国訛りが、
話題のきっかけ
になることも

大井町を視察…。
他の地区のモデル事業
は、やはり気になる。
−50

課長でも地域に
出れば若造です。
−10

「面白そうだね」の
一言に背中を押される。
+50

「アンケート使っていいかな？」
「いいとも！」
市に快諾してもらう。
+50

Stage 3 助走期　嵐に備える！

Stage 2 黎明期　嵐の予感

Stage 7
脱・斜陽期　あらたな出発へ！

GOAL

- 地域アセスメントの（ほかの地区にも活かせる）手法がいくつか実践できた。
- 関係者の顔と顔、情報を共有する場やツールができた。
- 他地区支援のモデルとなった。

これらを繰り返して、

ちがう地域で　ちがうCSWが　ちがう手法で

仕事をしていくのである。

『第５次大和市社協地域福祉活動計画』の実施方法を探っていたところ、協働事業の話が。
これは「渡りに船？」と思い、引き受けたところから・・・

START

- 地域アセスメントの実践モデルをつくりたい。
- 地域関係者の顔と顔が見える場をつくりたい。
- 鶴間地区での生活支援のしくみをつくりたい。
- 地区担当CSWの力量を高めたい。

市役所の他の部署・他地区の医療機関がシンポジウムに参加してくれる。 +200

包括支援センターの地域ケア会議に参加。連携が形に！ +100

他地区への波及を目指して、地区社協リーダーセミナーを企画。 +50

コミュニティソーシャルワーカーの仕事とは、重き荷物を背負いて、遠き路を行くがごとし…。 +100

だからこそやりがいがある。

マップ見て、あらたな気づきをアドバイスされる。 +50

苗字から名前で呼び合う関係になる。 +70

決して深い中ではないですが…。

残業が増えて増える体重…

フォーカス・グループ・インタビュー（FGI）のファシリを後輩に託す！ +100

報告会、マップ、事例集…これからの鶴街っくフォーラムを考える。 +30

メンバーの思いや意欲を再確認。このメンバーで間違いなかった！ +200

報告会で自己評価。これからの鶴街っくフォーラムを考える。 +60

後輩の生みの苦しみを陰で応援！

シンポジウムまであと少し！職員で励まし合う。 +80

みんなに活用できる地域資源マップを作ろう。 +170

大勢の参加者の前で、これまでの経緯と、これからのことを話す。 +120

地域資源マップや事例集など

可視化した成果物みて達成感。社協と一緒にやることの意義を感じる。 +150

シンポジウム運営に主体的参画する。 +80

コアメンバー

まさにコア！多彩なメンバーが集まる。 +100

今までの関りを思い出し、適任者に声をかけて回る。 +50

それが県社協のやり方かぁ!!

市社協

この事業、やるならやろうと覚悟決める。 +50

時間なし、予算なしでの安請け合いに後悔する。 −50

地域でのアセスメントをモデル化にしよう！と意気込む。 +50

周辺地域の人々

なにをするにも事前説明が大事と痛感。 −100

商店会の調整は不調に終わる。 −50

Stage 1
夜明け前　嵐の前の静けさ…

05

大和市社協の実践

「鶴街（つるまち）っくフォーラム」の軌跡

～奇跡が輝石になるまで～

大和市社会福祉協議会　佐川 博之

起の章　「夜明け前～黎明期」

鶴街っくフォーラムでは、アセスメント目標を「介護予防ニーズの分析」と「社会資源情報の把握」の二つに設定しました。その背景には、鶴間という地域に地区社協による「個別支援」の活動を生み出したいという下心と、数多く存在する社会資源を関係者で共有するためのツールをつくりたいという目論見がありました。

したがって、コアメンバーは、地区社協役員を重視するとともに、子育て支援から介護保険事業所、障がい者支援機関や地域包括支援センター、調剤薬局の薬剤師など、様々な分野、立場（住民から専門職）で活動をしているメンバーで組織しました。個々の経験や活動実績、専門的立場からの課題提起を期待しつつ、メンバー相互の作用による高齢者分野にとらわれないアセスメントを期待しました（不安も大きかったのですが）。

さらに、コアメンバーをアセスメント目標ごと二つのチームに編成し、チーム内での密度の濃い議論や作業と、全体会議での他チームからの客観的評価を加えることで、相互作用を鮮明にしていくという手法を取り入れました。

承の章「助走期～成長期」

介護予防ニーズの分析においては、大和市が行っていた『介護予防アンケート』の鶴間地区データを活用しました。分析は、「生活のしづらさ」（会議では“ちょっとした困りごと”と表現しました）を、数量的に分析するだけではなく、住民としての視点や専門職としての経験を出し合い、質的分析を試みました。また、全体会議では、アンケート結果を象徴的に示す具体的な相談や支援事例を紹介することで、地域での個別支援の必要性をアピールしました。

一方で、社会資源の把握においては、高齢者支援が中心である地区社協関係者と、あえて子育て支援や障がい者支援を行っている専門職との混成チームにしました。別な見方をすると、地域のことをよく知っている住民と地域のことをあまり把握していない関係者によるチーム編成を意図的に行ったということになります。ミクロとマクロの融合が、個を支える地域をつくる基盤になると考えたからです。

大和市アセスメント実績

Ⅰ アセスメント目標	・地域の生活上の困りごとや解決すべき問題点を、既存の調査・関係者からの聞き取りで明確にする。 ・地域の生活上の困りごとや問題点を解決するために存在する人・施設・団体や活動について調べる。				
Ⅱ アセスメント方法	A　量的調査	28年度介護予防アンケート（既存）の結果を分析・評価			対象：鶴間地区の介護認定なし65歳以上（回答率63.5%）
		介護予防ニーズ、社会資源アンケート			対象：自治会長・鶴間地区民生委員児童委員
	B　質的調査 フォーカス・グループ・インタビュー		12/15	子育て支援者 6名	対象：チャイルドケア/主任児童委員/子育て支援センター/母子保健担当（行政）/子育て中の親（やまとボランティアセンター）
			2/13	障害者支援者 6名	対象：障害者自立支援センター/相談支援センター松風園/ワーカーズ 想 前代表/障がい福祉課（行政）/発達支援担当（行政）/民生委員児童委員
Ⅲ コアメンバー会議	全体会　7/29、8/31、10/6、11/29、1/17、1/27、3/29 フォーカル・グループ・インタビュー　12/15、2/13 懇親会　11/29、3/29				社会資源情報分析チーム　9/6、10/24、12/12、1/11 介護予防ニーズ分析チーム　9/15、10/28

転の章「混迷期」

介護予防ニーズの分析過程において、「ちょっとした困りごと」は高齢分野だけの課題ではないことが分かってきました。この実態をより、具体化するため、子育て支援や障がい者支援の分野のメンバーやその分野の活動者に行うフォーカス・グループ・インタビューを企画しました。

一方、社会資源の把握過程においては、広範なニーズへの対応の必要性と関係者の連携と協働の基礎資料とするために、マップを作るという作業に取り組み始めます。さらに、マップに掲載する情報のいくつかを詳しく紹介する手段として事例集の作成を提案、それは目に見える成果物の作成というコアメンバーのモチベーションを高めていく効果としても意識しました。

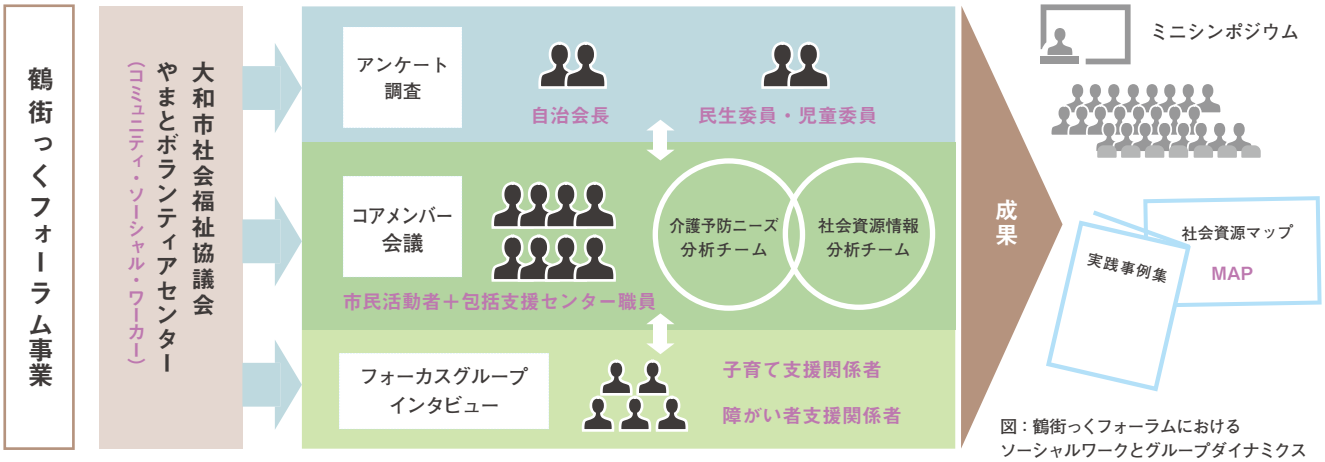
また、コアメンバーだけではなく、広く地域関係者の参画を促すため、地域の主要組織である自治会や民生委員児童委員にアンケートを行いました。そこで、明らかになったのは「地域の関係者は意外につながっていない」という事実と、「様々な関係者とつながりたい」という意向でした。その課題を解決する糸口として考えたのが、ミニシンポジウムによる地域関係者の組織化活動です。

結の章「成熟期～脱・斜陽期」

チームと、全体会議での意見集約を交互に行うことで、メンバーの持ち味が発揮され始めました。チームで話し合われた内容が、全体会議で違った視点で見直されるという流れは、結果的にコアメンバーの共通理解と一体感を生むことになりました。そうした流れを、できる限り早く伝える手段として「鶴のおんがえし通信」は効果的でした。

ミニシンポジウムには、約 70 名が参加。自治会関係者や民生委員児童委員、老人クラブが中心でしたが、地域包括支援センターのスタッフ（鶴間地区以外からも参加）や行政関係者も多数参加されました。

鶴間地区で「個別支援」の活動を生み出すという目的は、まだ達成されていませんが、コアメンバーである地区社協関係者には、地域における個別支援の必要性は大いに認識されたと思います。また、コアメンバーを中心に、ミニシンポジウムに参加された地域関係者には、個々の支援を効果的に展開するには、自分自身で基盤を作っていくことや専門機関との連携・協働が必要であることを、これまで以上に感じていただけたと思います。「鶴街っくフォーラム」が、地域内の一人ひとりの生活課題に着目し、その解決に向けて専門職と“地域の力”が結集する場になる。それが次に取り組むべきコミュニティ・ソーシャルワークであるといえます。



図：鶴街っくフォーラムにおける
ソーシャルワークとグループダイナミクス

Ⅳ 関連の取り組み	・鶴のおんがえし通信発行 15回 ・ミニシンポジウム開催　1/27　参加者約70名 ・車いすで鶴間地区フィールドワーク開催　10/15 中高生3名＋コアメンバー 1名 ・社会資源マップ、実践事例集の作成
Ⅴ アセスメント結果	・地域の関係者と活動の実態が浮き彫りにされた。 ・各関係者同士がつながりを求めていることが明確になった。 ・地域の生活課題に対し、地域住民力を活かす可能性が高いことがわかった。 ・関係者の連携や情報共有の場の必要性が再認識された。 ・繋がりたい、知りたい、という思いや課題解決の手立てを共有する場づくりの必要性がわかった。
Ⅵ 今後の取り組み	・コアメンバー会議やアンケート、FGI（フォーカス・グループ・インタビュー）で明らかになった関係者の情報共有 ・地域課題や活動実践者を知る機会や場づくり ・より多くの地域関係者への活動の理解、参加を深めるため、鶴街っくフォーラムを継続していく。 ・社会資源マップ、実践事例集の更新

06

大和市社協の実践

ピカッと光る

佐川ワーカーのシゴト

**地域の人の笑顔が好きだから、
考えます！行動します！頑張ってます！**

コアメンバーの

モチベーションアップツール①

楽しくなければ地域じゃない！

事業に愛着をもって関わってもらえるような工夫を、と事業の名称を募集しました。「鶴街っくフォーラム」に決定し、通信やファイルなどに名称があると、コアメンバーも「鶴街っくの時に・・・」「今度の鶴街っくで…」など積極的に使ってくれました。

モチベーションアップツール②

隣の芝生は青く見える

コアメンバーを社会資源情報分析チームと介護予防ニーズ分析チームの2つに分けてアセスメントを行うことを提案しました。限られた期間での事業の為、効率化が図れること、相手チームの進捗への意識など相互作用もあり、想像以上の成果物を完成させることが出来ました。

モチベーションアップツール③

好敵手の存在が成長を促す

大井町のコアメンバー会議に潜入捜査しました。他地区の取り組みを知り、メンバーに紹介することで、時に危機感を、時に自信をもって事業を進められたことは効効果的でした。

顔の見える関係づくりツール①

流行りの小ネタで話題提供

ちょっとした仕込みをして場を和ませ、会話がスムーズになるように考えます。この時は「PPAP」ならぬ「PA」。ペンと出身地のアップルで、作戦通り？一気に場が和みました。

顔の見える関係づくりツール②

飲み会は忘れたころにやってくる

最初に飲み会をして気心を知るより、苦楽を共にした後で飲み会をする方が効果的です。お酒での失態は、初対面では後を引いてしまいますが、知り合ってからであれば笑って許せます。

事業の可視化ツール①

使える・読める・学ぶ

メンバーや職員で事業の進捗共有できるように、可視化することは大事だと思っています。しかし議事録や記録は読まない。でも知っている人が写っている写真は目に留まる（はず）。と「鶴のおんがえし通信」を発行しました。SNS全盛の今だからこそ、気持ちも伝えたい、と手渡しにこだわりました。

事業の可視化ツール②

ミニシンポジウム

鶴街っくフォーラムの活動の経緯や成果、地域の事例発表を行い、関係者や地域の方に興味関心をもってもらおうとミニシンポジウムを行い、参加者から嬉しい感想を多数頂きました。

コミュニティソーシャルワーカー（CSW）の力量を高めるツール

山本五十六ではありませんが

やってみて（失敗してみて）、言って聞かせて（原因分析を話し合い）、させてみて（職員の工夫を尊重し）、褒めてやれば（何が良く、何を直すのか）、CSW※は自らの力を高めていきます。但し、そこには謙虚さが大切です。

※ CSW＝コミュニティソーシャルワーカー

コミュニティソーシャルワーカー

徹底解剖

愛読書

『るろうに剣心』『三国志』『水滸伝』

好きな映画

『十二人の怒れる男』『となりのトトロ』

好きな作家

島田荘司、綾辻行人

宮部みゆき、スティーブン・キング

好きな小説

『サボテンの花』『とりつくしま』

座右の銘

「努力する人は希望を語り　怠ける人は不満を語る」

「神は、乗り越えられる試練しか与えない」

「他人の落ち度を引き合いに出して、
自らの正当性を語る人間にろくな者はいない」

スイッチアイテム

『神奈川新聞』の「きょうの運勢」
を読んで、その日の動き方を考えます。

よく見るテレビ番組

サザエさん

最後のじゃんけんは、その週を占う一大イベントである。

水曜どうでしょう！・ブラタモリ

吉田類の酒場放浪記

女酒場放浪記・笑点

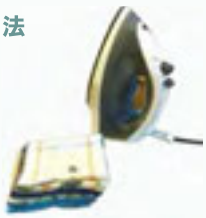
仕事のストレス解消法

アイロンかけ

DVD鑑賞

散策＆街歩き

妄想



こだわりのアイテム

『陰山手帳』

10年、この手帳を使っています。

『uni　JETSTREAM』

５年、このボールペンを使っています。

社会福祉の今の課題について

月並みですが、社会福祉の課題の原点は“貧困”だと思っています。そして、解決の原点は“連携”だと思っています。“貧困”も単なる経済的貧困だけではなく、様々な要因を抱えている事例が多く、一方解決に向けた動きも様々に点在しています。地域や暮らしという視点で、課題と解決策を組み立てていくことが、これからは必要であると考えます。

もし、CSWじゃなかったら？

古本屋の主人

単純に本が好きなので

宅配便の運転手

アルバイト経験あり。なにせ、名字が佐川ですから…。

「ジャングルクルーズ」の船長さん

ＴＤＬのアトラクション

今、気になる社会問題は？

SNSをめぐる情報管理

ものすごい速さで情報が伝搬し、そこでいとも簡単に人を傷つける行為や現象があふれています。便利さと引き換えに、何か大切なもの、人間らしさが失われてしまうことが危惧されます。コミュニケーションの取り方を真剣に習得する術を考えなくてはいけないかもしれません。

07
大和市社協の実践

市民ワーカーたちの底ヂカラ
THE 鶴間

青木 恵美子さん
鶴間地区社協副会長、鶴間地区民児協会長

まず、アセスメントとはな～に？名称は聞いていても、実際行うとなると少し不安？でも、市社協の佐川さんが「大丈夫！」というので勉強させて頂こうと思いました。

会議を進めているうちに、これまでなんとなく聞いたことがあった子育て支援や訪問介護のＮＰＯ団体、障がい者自立支援センターの方と親しくなり、こども食堂や家事支援、障がいを持つ方の就労支援など具体的な取り組みを知ることができました。

私は主婦、地域の住人として自分の立場での問題点など、ぶつけていきました。が、その中で、安心感が生まれ、参加してよかったと思えるようになりました。

地域社会において問題を発見し、地域の顔の見える関係作りを、少しずつ私たちの団体で役に立ててこれからも私たちの出来る事を目指していけたらと思います。感謝！感謝！

天野 宏一さん
特養サンホーム鶴間事務長、大和ケアマネージャー連絡協議会会長

コアメンバーとして声をかけていただけた時は、ちょうど施設として包括だけではなく特養としてですが、施設の増築・改築の予定があり、そこに地域のスペースとしてボランティアルームの常設や交流スペース等を考えていて、地域の活力を地域住民や施設にと、考えていました。包括時代に、介護予防事業からの自主グループの立ち上げを支援していたのですが、独立していける仕組みもできたら、という地域に向けてのアプローチを考えていましたので、タイミングが良かった。やっぱり地域については地域との接点が多く、老若男女の情報や地域のキーパーソン等、ツボを知っているという点で社協が強いと思いました。この事業を進める中お世話になっている地域の方々の今まで知らなかった地域活動や他の事業活動を知ることができました。そして地域の底力を感じることができ、今後も地域の中の特養としてできることを地域と協力していきたいと思いました。

小川原 悟さん

薬局双葉堂　薬剤師、ケアマネジャー

私は以前より、地域の中で何が出来るのだろうと思い悩んでいました。患者さんにお薬を渡し、6名のケアプランを作成するに留まっていたそんな時にお話があり、私は「参加します」と即答した気がします。会議の中、この地域にこんなに多くの社会資源があり、皆さんが活動していることの驚嘆と同時に、自己の無知に赤面したことを覚えています。皆さんの一言一言から地域への暖かい気持ちが伝わり、私も「ガンバロウ」と再認識できた思いです。

増井 正幸さん

鶴間地区社協副会長、ゆめクラブ花みずきの会　会長

地域アセスメントコアメンバーにお呼び掛けを頂き正直なにをするのだろうと思いました。「県社協のモデル事業」として鶴間地区の実情を分析し、社会資源を探ることの意義が理解でき、それまでは他の社会資源の活動状況など知らなかったのでこの事業を通じ実態を知ることができ、私自身が現在進めている「花みずき会」の活動の参考になり、会を重ねる毎に興味が湧いてきました。私たちが日常と取り組んでいる課題や将来の方向性そのものが、コアメンバーと共有でき、一応の成果を得たことは大きな喜びでした。

竹内 ひろみさん

NPO 法人 ワーカーズ想　前代表

NPO でケアマネを経験した私が地域デビューの時でした。「地域で活動している皆さんとご一緒できる」と大変うれしく思いました。

社協の皆さんはコアメンバーから色々と出る意見、経験を、みんなで学んだ『アセスメント手法』を駆使し、方向づけしてくれました。感謝でした。「そうですよね」と皆で合意・確認しながら進める時間は貴重であり、楽しかったです。地域力の駒として、地域支援を作っていきたいと思います。

佐藤 倫孝さん

大和市障害者自立支援センター所長

今回コアメンバーとして、お声かけ頂いた時には、「地域をどのように作っていくか」という障がい福祉分野での課題ともリンクする内容でしたので、興味津々で活動に参加し始めました。コアメンバーとして活動していく中で、市社協と地域の結びつきの強さを改めて実感するとともに、会議を通して色々な出会いがあったことにも感謝です。今回の出会いを大切に、小さな地域にとことん拘りながら、支援や連携の輪を広げていければと思います。

永井 圭子さん

NPO 法人 チャイルドケア代表

昨年、事務所を鶴間に移転したのが運の尽き!?佐川さんより鶴街っくフォーラムのコアメンバーに声を掛けて頂き感謝の至りです。社協の方々は想像以上に楽しい面々でした。勉強不足の私にとって鶴間地区のアセスメントをするという重責も初めは不安でしたが、夜の情報交換会 !? にも何回か出席しているうちに、少しずつ社協への理解が深まってきたところです。

せっかく出会えたステキなコアメンバーや社協の方々と、これからも活動を続けていかれたら嬉しいかも！

鳴海 憲也さん

鶴間地区社協　会長

鶴間地区社協会長という重責を担うことになった矢先に「地域アセスメント」のコアメンバーにと言われ、戸惑うばかりで何をどうして行くのか皆目わからないままコアメンバー会議に出席していました。しかし、メンバーの皆さんとその都度意見交換していくうちに、目標の形が出来、ゴール地点の『だれでも鶴間―地域マップ』が形成されたときにはホッとしました。このマップが今後の福祉活動に活かされてくると、これまでの苦労が報われることでしょう。

まちねた　トリビア

「ぼくは小便小僧です。縁あってココ『サンホーム鶴間』にいますが、以前は、江ノ島水族館の前で50年近く観光客にあいきょうふりまいていました。小便小僧は平和とやさしさのシンボルです。会いに来てくださいね」

サンホーム鶴間　大和市西鶴間8-1-2

08 大和市社協の実践

伴走支援アドバイザー
聖徳大学・聖徳大学短期大学部　心理福祉学部　准教授
豊田 宗裕氏　MUNEHIRO toyoda

PROFILE

神奈川県社会福祉協議会、日本総合研究所、横浜国際福祉専門学校等を経て現職
よこはま地域福祉研究センター理事長も兼務
専門は地域福祉、コミュニティワーク、社会福祉計画、社会福祉運営管理　ほか
主な著作に、「少子化と社会法の課題（共著）」法政大学出版会、「地域福祉とソーシャルワーク実践／実践編（共編著）」樹村房　などがある。

アセスメントの必要性と効果

1 生活課題・生活ニーズ把握

地域社会で生活課題を抱えて生活する住民の課題解決のために、生活ニーズを直接的に把握し対応することが求められます。アセスメントは、地域で生活する人々の生活実態や生の声を広くつかむために有効な取り組みです。

2 個別ニーズを地域ニーズとして集合的に整理する

地域住民や専門職（専門機関）が協力・連携することは不可欠です。住民と行政・専門機関等がアセスメントを協働で行うことによって、個別・地域の課題を共有すると共に、異なる立場で取り組む互いを知り合い、地域の課題解決に必要な主体性を養い、連携体制の構築につながります。

3 「個別ニーズ」から「地域のニーズ」を導き出す

地域福祉推進のためには、個別ニーズの中から「地域課題として解決すべきニーズ」を抽出することが重要です。地域課題として解決すべきニーズを抽出し、「課題の普遍化」を行うことにアセスメントの効果があります。

4 社会資源の発見と活用方法の検討

地域には生活支援を行う上で必要な社会資源が存在します。しかしそれらは、ボランティアなど人的資源のように潜在化していて積極的に掘り起こす必要があるものもあります。また、福祉以外の領域で、地域福祉に役立つ情報や支援が得られる場合もあります。多様な社会資源を発見し活用方法を検討するためにも、アセスメントは有効です。

5 地域の「強み」の活用と「弱み」の克服

地域福祉推進のためには、地域が持つ力を積極的に活用し解決に結びつけていくことが重要です。アセスメントによって、地域が持つ「強み」と「弱み」の両者を把握し、強い部分は積極的に活用し、弱い部分の克服に繋げることができます。

〈大和市社協 アセスメント評〉
「鶴街っくフォーラム」

イイね① 目的を明確にして事業を繋げ、成果に導く

本事業を行うにあたり、大和市社協職員では５つの地域課題を設定しそこからアセスメントの目的を明確化し、検証を行っています。「何のために、アセスメントを行うのか」、「成果はどのように地域福祉活動に活かせるのか」などを、必要に応じて、事業の過程で何度も丁寧に説明し、関係者間で共有化したことは、一定の時間を要し、たくさんの人や機関が関与する事業を円滑につなげることに繋がりました。

イイね② 無理のない分担でメンバーの役割・責任の遂行と達成感に

アセスメント目標を達成するため２つの取り組みを設定し、メンバーも２つのチーム（介護予防ニーズ分析チームと社会資源情報分析チーム）に分けました。

介護予防ニーズ分析チームでは、市が実施した介護予防に関するアンケート調査の分析・評価と、子育て・障害者支援に関するフォーカス・グループ・インタビューを実施し、地区内における具体的な福祉ニーズの把握とその支援事例の共有化を図り、課題の解決に向けた検討が行われました。また社会資源情報分析チームでは、生活課題を解決するための社会資源（人、施設、団体や活動など）が地区内にはどの程度あるのか、「地域マップ作り」を通して実態把握をしました。コアメンバーそれぞれが役割を持ち、各チームで検討されたことを合同会議（鶴街っくフォーラム）で報告しあい、地域課題に対するメンバーの気づきや理解が進みました。

地域住民・専門職混在のコアメンバーは一様に大変忙しく、一同に会うことや取り組みの作業時間を見出すことが難しい中、２つの取り組みを設定し、２チームに分けたことで、無理ない会議の開催・作業の実施が実現し、役割と責任が果たされました。こういった事業のマネジメントが、メンバー全員の達成感にも繋がりました。

イイね③ アセスメントの過程や結果を発信、情報の共有化が実現

本アセスメント事業のプロセスや結果を様々な形で発信し、関心の拡大を積極的に行ったことも評価できます。広報紙としての「鶴のおんがえし通信」の発行（計 15 回）、実践事例集・社会資源マップの発行、フィールドワーク事業としての「鶴街ウオッチ de GO!」、そして成果発表の場

地域アセスメントは コミュニティソーシャルワーク 推進の土台

～地域自立生活の達成を目的とした「個別支援」と「地域支援」の総合化の取り組みを伴走して～

としての「ミニシンポジウム」の開催など、多様な形態で発信したことは、社協内部でも、一部の本事業担当者のみの仕事になることを防ぎ、他の地域住民や、専門職（専門機関）にも、事業の認識を広げ、アセスメント後の課題解決の実践に繋げることを視野に入れた共有が実現しました。複数の方法で、計画的に情報発信を行ったことは、優れた戦略であり、社協職員の努力がみられました。

鶴街っくフォーラム　コアメンバーの強み

大和市社協は、本事業を鶴間地区をモデル地区として実施しました。また、推進母体を地区社協とし、コアメンバーは鶴間地区社協のメンバーを中心に構成しています。こうした設定は、社協のコミュニティソーシャルワーカー（CSW）の地域福祉を推進するための一つの戦略です。

地区社協会長・副会長を中心に（自治会長、民児協代表、老人クラブ代表）、地区内でサービス事業を提供する児童福祉関係の市民活動団体の代表と障害者・高齢者施設の代表者など、総勢８名で構成されたコアメンバーは、多様な視点が求められる地域福祉推進を実現できるメンバーです。さらにこのメンバーを中心につくられた会議を「鶴街っくフォーラム」として特定化し、積極的な参加を意識付けしました。

大和市は県内でも地区社協活動が活発な地域であり、所属する住民活動者を中心に事業が展開されたことは、強みを大いに生かす結果になりました。人数は８名でしたが、この中にも新たな出会いがあり、互いの活動を知り合い、今後の更なる地域福祉推進の取り組みを模索・実現していく関係性が構築されたことは高く評価します。

佐川ワーカーのシゴトと事業の体制

コミュニティソーシャルワーク全体の展開を視野に入れた事業の組み立て

今回の事業では「地域アセスメント」がその主たる目的とされたわけですが、アセスメント自体は全体の一過程であり、最終的な目的は住民の主体性の確立とそれを基にした福祉コミュニティづくりであると言えます。佐川ワーカーは、そういった最終的な姿や、プロセスを踏まえた上で、「地域アセスメント」の必要性と重要性を良く理解され、本事業を進めていました。

各事業の実施意義を理解し、様々な実践技法を「適時適切」に展開

コミュニティソーシャルワークの実践においては、個別ニーズの解決だけでなく、常にそれを地域ニーズとの関係で判断・検討を行う必要があります。特に地域ニーズの解決にあたっては、個別ニーズの普遍化と共に地域の状況をいかに正確に把握し、解決に結びつけるかを考える事が重要になります。そのための技法は数多く存在するのですが、それらを「適時適切」に、また状況に応じて「応用して」用いていた点は、地区支援の模範となる実践であったと思います。

他の職員のコミュニティソーシャルワーク実践力の向上を常に視野に入れ尽力

今回の実践を通じて、佐川ワーカーが目標としていた事項に、他の社協ワーカー（地区社協ワーカー）のコミュニティソーシャルワーク実践力の向上があったと思います。今回はモデル地区における事業展開という位置づけで実践されていましたが、今後この事業が他地区へ展開していくことを考え、同僚の複数の職員とチームを組み各職員に役割を与え実践の取り組みをしていたことは、人材育成と言う視点からも大変重要なことであったと理解していました。

更に発展する地域福祉推進への期待

アセスメントで明らかになった各種の情報を基に、今後この事業を具体的にどのように展開していくか、地域全体でこうした実践を共有化する場をつくること、さらにその実践体制を確立し継続していくことが重要であると考えます。

今回、その具体的な場としてつくられた「鶴街っくフォーラム」を今後どのように位置付けまた活用していけるか、今後の実践に期待するところです。さらにこの事業は、今後市内各地区で展開されている地区社協活動の実践モデルとして位置づけがされ、それぞれの地区特性にあったコミュニティソーシャルワーク実践につなげることが期待されています。アセスメントの重要性を理解し、効果的に展開されることを期待します。

09

足柄上郡大井町の実践

アセスメントロードマップ

足柄上郡大井町

Stage 6 結実期：成果共有、目標達成の検証

Stage 4 成長期：アンケート・ヒアリング調査開始～終了

Stage 5 成熟期：調査結果の分析と共有

Stage 3 増強期：目的と方法についての合意形成

シンプルな調査も全数なら意味のあるものに。

目的を見据えた設計をアドバイス +70

地域住民が自分のまちを肯定的に捉えていることが分かってくる。 +30

町独自の情報を住民に活用してもらえるように促す。 +20

自治会未加入の住民も関心がないわけではない。

駅前の純喫茶で昭和の洋食を味わう +80

アンケートの回収率が高くて嬉しい驚き +100

タイトなスケジュールに、必殺「ナチュラル助けてオーラ」で、応援を求む。 +50

3つのグループヒアリングを開始！コアメンバーに入ってもらうよう呼びかける。 +20

たくさんの記述から住民の想いを読み取る。 +100

アンケートの印刷、配布、データ入力に追われる。 +50

グループヒアリングに参加。気づきや刺激を受ける。 +150

大井町あるある危険!! イノシシ出現 −80

狩りの達人登場で、事なきを得る +80

助っ人加わり、メンバー15人に増強

会議でメンバー全員が積極的に発言 +300

アンケートには口に出さない色んな声がいっぱい。

プラン作成の中身や普段の活動が整理されてくる。 +120

地区の新聞に事業を掲載して事業をPR +80

メンバー御一行様、研修会場へご案内！

生活の中で、調査したい要素を絞る。 +30

伴走支援チームにプレッシャーをかけられる。 −50

早く調査を始めないと、と焦り出す。 −70

目指す地域像の統一を図りたい

お互いを知るにはノミュニケーションだ！

座学と実習を経験。 +100

アセスメント目的が定まらず、少し心配になる。 −100

調査方法に意見を出してもらおうと意気込む +20

会議の時間配分がうまくいかず四苦八苦 −100

アセスメントの意義がわかってもらえたか、グループワークで意見を引き出しきれたか自問自答 −50

町役場の発言がもっと欲しいなぁと感じる。 −50

手法の話に偏ってしまったと反省 −30

+150

メンバーの意欲と能力の高さに期待が上がる。 +100

地域の課題への意識共有ができたと感じる。 +80

Stage 2 培養期：合同研修で知識・意欲と関係向上

Stage 7

収穫・種まき準備期：報告会、フィードバック、取り組み創造

GOAL

- コアメンバーと町社協の合意ができた。
- 暮らしにくさとその要因を具体的に理解した。

【気づき】

- 地域の強み、弱みに対し調整役が必要だ。
- 地域の活動への意欲を形にしていくべきだ。

これらを繰り返して、

ちがう地域で　ちがうCSWが　ちがう手法で

仕事をしていくのである。

Pre Stage

種まき期：コアメンバーの人選

分野に偏りなく、
これから担い手になってほしい人に
アプローチをかける

START

- 小地域単位でのニーズを把握したい。
- 個別支援活動と地域づくりを循環させたい。
- 町との連携を図り、課題解決を推進していきたい。

最強メンバー14名が結集！

コアメンバー

ふと、これからの暮らしに不安を感じる　−50

老後の健康、近所づきあい、ごみ出し、収入、買い物…

熱心に頼まれたけど、何する？どこから始める？　−30

町社協

まずは、ひとりひとりにお願い回りから　+50

伴走支援チーム

町社協が駅まで車で送迎してくれる。　+100

温かい心遣いに遠方出張も頑張る！

大井町出張は、まるで小旅行（汗）　−20

+200

Stage 1

発芽期：コアメンバーチーム結成まで

子ども会には、習い事等で参加できない状況にある。

花粉飛散にアレルギー体質が反応　−70

大井町あるある

早くも１月にスギ花粉が降り積もる…

住民と町社協をつなぐ足掛かりを実感　+80

子ども、子育ての実情が見えてきた。　+50

報告会資料作成でスキルを発揮　+80

成果をいかに活動につなげるか、これからの決意を新たにする。　+100

子ども、子育ての実情が見えてきた。　+50

36%の親が預けられる人がいない

アンケートの集約・整理は想像以上に大変（汗）　−150

みんなの中に結束感が生まれる。　+150

お祭りに参加し、地域のつながりが強まる。　+200

コアメンバーたちがバージョンアップ　+100

Power UP!

じっくりとプランに反映したい。

「絶対、放置しないぞ」と心に誓う。実践に向けて、

孫の送迎　祖父母の出番。　生きがいに感じる。　+30

アンケートの結果から、大井町全体の問題だと分かる。　+80

+120

声かけ、見守りなどの協力ができる人が38%

住民の活動参加への関心が見えてくる。　+50

大井町あるある
高校生、大学生の通学。駅まで車送迎が不可欠。　−70

10

足柄上郡大井町の実践

ふくし力増強へ向けた軌跡

～夢おおい未来はふくしでまちづくり～

大井町社会福祉協議会　矢野 慎一

起の章　「発芽期～培養期」

社協の小地域担当として、「小地域活動を交流活動から、支え合い・個別支援活動に発展する」という課題を以前から抱えていました。今回、協働事業に参加したのは、事業を活用することでこの課題を解決できるかもしれないと考えたからです。

まず、具体的なアセスメントのテーマを設定し、協議の場にふさわしい方をコアメンバーに選抜しました。調査想定地区で活躍している方や民生委員、地域福祉プラン進行管理委員、理事や評議員からも候補者をピックアップすると 20 名にもなりましたが、14 名に絞りました。また、調査地区以外にお住いの方もメンバーに入れたり、調査エリアについても町内会によって大きな人数の偏りがないか等にも配慮しました。更に、今まであまり社協事業に関わりがなかった方や若い方にも入っていただき、新しい視点や斬新な課題提起を期待しながら編成を考えました。今後、地域で活動を主導していただける人材になってくれることも期待しての選抜です。

コアメンバーの依頼にあたっては、事務局長とともに直接訪問し趣旨説明を行いました。戸惑いながらも、自分にできることは協力させてください等の回答をいただくことができ、改めて事務局の眼力の正確性、メンバーの課題意識の高さをうかがい知ることができました。

承の章「増強期～成長期」

アセスメントの手法

町内の３自治会にアンケートと３つの団体にインタビューを行うことにしました。アンケート調査は、自治会加入者を想定していましたが、コアメンバーから自治会未加入世帯の自治会や防災についての考え方も調査したいと意見が出され、新宿自治会では、自治会未加入世帯にも実施することになりました。アンケート用紙の配布もコアメンバーが行うなど取り組みへの熱い思いを感じました。また、上山田自治会では、地域のお祭りについてアンケート調査を実施

大井町アセスメント実績

Ⅰアセスメント目標	・個別支援活動と地域づくりを循環させる。 ・小地域単位でのニーズを把握する。 ・町（町役場）との連携を図り、課題解決を推進する。	
Ⅱアセスメント方法	A　量的調査 アンケート	対象：下記 3地区の全世帯（回収率69.8%） 新宿（回収率73.3%）、新宿自治会未加入世帯（回収率13.2%）、西大井（回収率72.8%）、上山田（回収率90.8%）
	B　質的調査 グループインタビュー	対象：①民生委員児童委員協議会 ②14地区の小地域福祉活動推進組織 ③障がい児者親の会　えんぴつクラブ
Ⅲコアメンバー会議	打ち合わせ会 グループインタビュー アンケート作業部会 事務局打ち合わせ 懇親会	5/27、8/10、8/23、9/14、10/4、12/7、12/20、1/30 10/11、10/25、10/28 10/13、1/23 8/31、12/6、12/19、1/6 6/17、12/20

してみたいとの意見から、コアメンバーが独自の調査項目を加え、3自治会とも独自の設問を盛り込むアンケート調査となりました。

アンケート調査票印刷・分析作業

アンケート調査票の印刷製本作業は、当初社協職員で行うつもりでしたが、社協職員の時間的な限界を感じ、急きょコアメンバーに協力をお願いしました。また、結果入力作業も社協職員だけでは手に負えないボリュームで、コアメンバーに協力を依頼し、快く引き受けていただきました。選択項目や記述回答を入力することで、アンケートに協力頂いた地域の方々の具体的課題に直接触れることになり、問題意識がより高まる結果となったと感じています。

グループインタビューは、3団体に実施しましたが、コアメンバーにも参加いただき、今まで接点のなかった団体の意見に触れることで、新たな発見があり勉強になったとの感想をいただいています。

転の章「成熟期～結実期」

アンケート調査の単純集計結果が出ると、よりわかりやすく伝えたい点やクロス集計の試み等様々な意見が出されました。メンバーの関係性が時間の経過と共に豊かになり、意見を積極的に出せる雰囲気が醸成しました。グループワーク等でも、メンバー間で意見が対立したりすることはなく、テーマに沿って、共通する課題や解決策について柔軟に他の意見を受け入れながら個人の意見も主張する相互作用が発揮される状況が会議の場で頻繁にみられました。

調査結果をクロスしてみたり回答記述をみたうえで、メンバー自身の気づきや多様な意見を出したことは、今後の活動に大いに活きていくと思います。

結の章「収穫・種蒔準備期」

全体報告会での報告は２名のコアメンバーが担当。リハーサルを行う姿に熱意を感じると共に主体的に取り組んで頂いていることをとても嬉しく思いました。本事業に取り組むまでは、関係性のなかったコアメンバー間につながりができ、その中から連帯感が生まれ取り組んでこれたことに大きな意義を感じます。

Ⅳ 関連の取り組み	A　アンケート調査説明会　9/18（西大井）、9/24（上山田）、9/25（新宿） B　町との打ち合わせ　3/25、6/6、6/28 C　福祉活動推進交流会にて事業報告　3/13
Ⅴ アセスメント結果	・個人と地域資源や団体を繋ぐ「つなぎ役」（コーディネーター）の必要性 ・見えてきた暮らしにくさとその要因ごとに、解決の主体を整理（個人、行政、社協、地域組織） ・地域組織役員の担い手不足に対し、参加による活動のやりがいの共有、選出方法と負担軽減のための工夫などが必要 ・住民の「手伝ってほしい」と「手伝いたい」気持ちなどのマッチングが必要
Ⅵ 今後の取り組み	・コアメンバーのつながりを今後の地域福祉推進に活かす。 ・お互いさまの意識を啓発するツールとして広報紙を活用 ・住民参加型在宅福祉サービスの見直しと新たな活動づくり ・整理した課題を第3次地域福祉プランに反映（平成29年度策定） ・3地区ごとの活動の振り返り、今後の取り組みへの反映 ・3地区以外の地区へ派生 ・町との連携を図った活動づくりの推進

11 足柄上郡大井町の実践

ピカッと光る

矢野ワーカーのシゴト

**人のため地域のために役立ちたい！
チカラを合わせて実現を目指します！**

役割意識とメンバーシップを高めるチカラ

配布資料などをストックしていけるよう、事前の打ち合わせの時からコアメンバーには共通のファイルを配布。役割意識を高め、モチベーションもアップします。

前に出すぎず、住民の積極性を引き出すチカラ

CSW※1として公平公正な視点を持ちつつ、先導しすぎないスタンスが特徴。矢野さんが助けを求めると、たくさんの協力者が自然に集まります。結果的に多くのプロセスに住民が関わることになり、情報共有と意識向上につながっています。

データを集約・可視化するチカラ

単純入力後のアンケートデータ集約は社協ワーカーの腕の見せ所。特殊なソフトを使用せずコツコツまとめていきました。また、報告会で使用するPPT※2はセンス良くシンプルに作成しコアメンバーオリジナルの発表をサポート。

生の声をリアルに届けるチカラ

グループヒアリングは、小地域福祉活動推進組織、民生委員、障がい児親の会をターゲットに設定。日頃接点の少ないコアメンバーに参加してもらい、リアルな声を直接受け止めてもらうことができました。

組織内で協働するチカラ

研修、コア会議、打ち合わせ会は町社協担当者3名が常に参加。小さな社協ならではのチームワークとフットワークで、先輩ナイスガイ職員2名が矢野さんを強力にバックアップ。

住民同士の共感性を高めるチカラ

19自治会は住宅地エリアと農村丘陵エリアに分かれており、生活環境に大きな違いがあります。全地区合同のヒアリングでは、農村丘陵エリアの生活上の困りごとに共感するだけでなく、ならではの強みも発見。地区の問題を町全体で考えるための一歩となりました。

メンバーへの敬意をさりげなく示すチカラ

最強コアメンバー15名は、年間10回程度の会議、打ち合わせに快く、休みなく参加。全員が公平に、率直に発言できるよう進行に配慮しました。長い会議時間を有意義にかつ和やかにするため、時にはＣＳＷ自らコーヒーのサービスも。

※1 CSW＝コミュニティソーシャルワーカー　※2 PPT＝パワーポイント

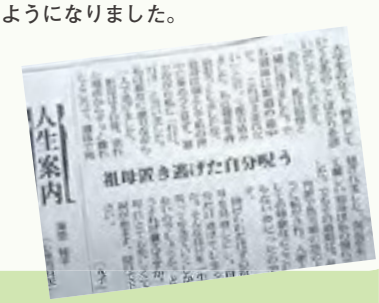
コミュニティソーシャルワーカー

徹底解剖

愛読書

新聞

特にありませんが、日々読んでいるものといえば、読売新聞。社会情勢や政治の動向など気にしています。最近は、まんべんなく読むようになりました。特に「人生案内」チェックしてます。「首相の一日」もなぜだか見るようになりました。



座右の銘・こだわり

「己の欲せざる所、人に施すことなかれ」

自分の車は自分で洗車する（洗車機にはいれない）

スイッチアイテム

ネクタイ

実は意外と好き。あまり仕事ではつけませんが、ネクタイするとちょっと気合入りますね。

よく見るテレビ番組

サスペンスドラマ・こどもアニメ

最近は、テレビもゆっくり見ていないです。時間があってつい見てしまうとすれば、2時間ドラマ（サスペンスドラマ）ですかね。それから野球やサッカー、ゴルフなどスポーツ全般見るのは好きです。あとは、子どもと一緒に「アンパンマン」や「しまじろう」も見てます。

仕事のストレス解消法

日帰り温泉

家族で行って、ゆっくりとお湯につかり、サウナに入り体を癒すことで、再起動するような感覚になります。そのあと一杯飲めれば最高ですね。結構長い時間お湯につかっていることが好き。箱根や御殿場の方面によく行きます。

こだわりのアイテム

名刺入れ

名刺は大事だと思っています。以前いた会社で名刺をいただく大変さを学びました。

社会福祉の今の課題について

当事者活動の活性化

最近特に感じるのは、団体活動の低迷です。老人クラブや子ども会、障がい児者親の会などからは、会員の高齢化や役員の担い手がいない等の理由で団体活動に行き詰まったり解散したりしています。抜本的な解決方法が見出しにくいのですが、当事者活動を側面から支援していくことは社協の大切な役割だと思うので、悩みどころですね。

もし、CSWじゃなかったら？

観光に携わる仕事

小さいころ憧れた職業です。今になって考えると、とても大変な業務であると感じていますが…。

気象予報士

畑違いかもしれませんが、意外と興味あります。以前、よく雨男と呼ばれていました。なぜ雨が降るのか、メカニズムを研究してみたいですね。

今、気になる社会問題は？

生活保護受給者の増加、人口減少問題、日本財政の健全化

今のまま進んでいくと、将来日本が破たんしてしまうと思いませんか。それでなくても人口は今後減少していき、労働力が低下するので、税収も減少する。このような状況の中で、生活保護受給世帯が増加することは、どうなのでしょうか。やはり、根本的なところから、対応を考えていく必要があると感じます。

12

足柄上郡大井町の実践

市民ワーカーたちの底ヂカラ

THE 大井町

神野 久代さん

地域福祉プラン進行管理委員
移送ボランティア、社協ヘルパー、民生委員

コアメンバーとなり10か月、話し合いのたびドキドキ感が絶えませんでした。手探り状態ではじめ、メンバーの地域への思いを伴走者の方達の導きで形ができ、ひと区切りとホッとしています。身近な方達への声かけは、これからも大事にしていきたいと思います。メンバーの一人として関わり、メリハリのある時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

藤澤 文彦さん

地域福祉プラン進行管理委員副委員長
プラン部会部会長、社会教育委員

地域における様々な課題を把握することができた。参加者の地域福祉に関する理解と認識が深まったことと思う。このことを踏まえて発信力、リーダーシップが発揮されることを期待したい。行政と連携を図りながら、行政では取り組みにくい事業を柔軟な発想で町民と共に進めていく。そのために自由な議論ができる場をより多く設定してほしい。

似内 克郎さん

自治会長、元小学校教諭、社会教育委員

本事業の研修、研究を通して、私たちコアメンバーは貴重な体験を得ることができた。今回の調査で、子どもたちの食事、発達、費用、学習の遅れ等の課題が挙げられ、行政、社協、地域にとっては解決に向けてこれからが正念場である。まずは身の軽い地域から行動を起こす。そこで早速、私たちの自治会では今年4月から「学習支援塾」を立ち上げ、生活を含めて中身の濃い活動に育てていきたい。現在の若者は、人生百年時代に入ります。昔の人の倍です。焦らずに足元を見て時には周りの景色を観る「鈍行列車の旅」を心がけてほしい…。

高橋 和久さん

上山田福祉推進協議会会長、元自治会長、遊びの学校代表

私の住む相和地域は少子高齢、過疎化が進み、かつて農業をしていた土地が休耕地となっており、人間よりもイノシシや鹿のほうが多いと思われる地区もあります。バス便も減り、日常的な移動手段に困るなど課題が多い中、アセスメントによりこの地区の良い点に目を向けることができました。例えば地域を離れていった人も運動会や行事にはたくさん集まる。葬式があるとすぐに回覧板で全世帯に知らせる。大井町にもこんなところがあったのか、という環境だが、小さな集落、顔の見える関係の中で、つながりの火を消さないように努力していきたい。

安池 範明さん

西大井ふくしの会会長、社協副会長
発展強化計画策定委員長、元教育委員

調査結果を分析し、福祉活動の見直しとあるべき姿を考えていきたい。住民への理解と共に考えるものとして、「西大井だより特集号」を配布し、課題解決ができればと願っている。アンケート結果から見えてきた地域の強み（地域活動に参加しやすい、隣近所がとても親切）を活かすための実践に取り組んでいる。例えば、地域のお祭りでは子どもたちが企画から参加して模擬店の店主を務める、太鼓の練習を大学生が指導するなど、「地域行事はみんなで」を合言葉に心を繋ぐ活動の輪を広げていきたい。

寺下 かつ子さん

民生委員、社協副会長
地域福祉プラン進行管理委員委員長

少子高齢化の進む大井町にとって「地域での問題は何か」を知る良い機会でした。どんな調査をしたら５年後、10 年後の大井町が見えるのか、アンケートの設問には苦労しました。社協のリードのもと、勉強会や話し合いを重ねるごとに問題も見え、今を知る良い手がかりになったと思います。時計とにらめっこしながらアンケート結果をまとめた矢野さんには敬意を表します。今後、この資料がふくし力の増強に、安心して年をとれる町づくりの前進につながれば幸いです。

下田 昇さん

新宿ふくしの会会長、民生委員

アセスメント協働事業により、「安心して地域で暮らせる」ことの意味が具体的に捉えられるようになりました。小地域福祉活動推進組織「新宿ふくしの会」の活動は、今思えば「元気な人を対象にしたものだった」と反省。今回のアンケートで、生活弱者から「膝痛でゴミ捨てに行けない。買い出しに苦労」「介護で休まる余裕がない」「障害者の将来が心配」・・・といった切実な声がたくさん寄せられました。弱者への対応も「ふくしの会」が受け皿にならなければいけないことを再認識させられました。

下澤 孝子さん

障がい児者親の会　会員
地域福祉プラン進行管理委員

地域で障がい児を育ててきた保護者でもある私ですが、地区内に知らない障がい児者のいる家庭があることがわかりました。団体活動に参加していない保護者の持っている不安や行政に望む意見を知りました。家庭以外での居場所、施設を作ってほしいという意見を地域の人の生の声として、安心して社会生活が続けられるように自治会や行政との関係づくりをしていきたいと思います。

小山田 雅子さん

あしがら広域福祉センターケアマネージャー

今回の調査がこの地域に住み生活している一人ひとりにとって「ここに住んでいてよかった！」と思える施策や活動につながると良いなと思います。そのためにできる事、しなくてはいけない事を住民の一人として考えていきたいと思わせてくれた事業でした。参加させていただきありがとうございました。

13 足柄上郡大井町の実践

伴走支援アドバイザー
田園調布学園大学　人間福祉学部 講師
小平 隆雄氏　TAKAO odaira

PROFILE
2013年東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科社会福祉学専攻博士後期課程単位取得退学。2007年田園調布学園大学助教、2011年同大学講師（現職）。専門は地域福祉、ソーシャルワーク。川崎市麻生区社協地域福祉活動計画推進委員会副委員長、横浜市都筑区・中川地区社協地域福祉活動推進アドバイザー等を担う。

アセスメントの必要性と効果

従来の社会福祉援助は、日常生活が大きく困難になった段階において、その個人や家族の求めに応じて、制度的な基準や専門的な判断で福祉サービスの利用に結びつけていくという形が基本になっていました。

しかし現在は、専門家による対処療法的な援助に至る前に、問題の早期発見をすること、また問題が大きくなることを予防する取り組みが重要視されています。その観点から、今日の地域福祉推進におけるアセスメントの必要性や効果としては以下の4点をあげることができると考えます。

1 生活者・活動者の視点から住民のニーズを把握する

生活上の問題の早期発見や予防のためには、人びとの日常生活の実態やそこで感じている思いを把握することが求められますが、そのような情報は行政や社会福祉の専門機関にとっては一面的・部分的にしか見えてこないものです。そこで、生活者である住民自身にアプローチして、広く深く生活の実態や思いを把握する取り組みをしていかなければなりません。

また、問題の早期発見や予防は、専門機関やその職員だけの取り組みでは到底対応しきれず、その地域で暮らす住民やその団体の協力なしには実現が不可能です。そのため、活動者としての視点から、現に地域活動を行っている住民やその団体がどのような実践を行っていて、どのような課題を感じているのか、また、活動に参加していない住民にはどのような理由や背景があるのかといったことを把握していかなければなりません。

2 個別ニーズを地域ニーズとして集合的に整理する

人びとが抱く生活上のニーズは個別性が高いものですが、問題の早期発見や予防のためには、個別ニーズを地域ニーズとして集合的に整理し、その地域ニーズに対応する地域的な取り組みを考える必要があります。アセスメントは、個別ニーズから地域ニーズを導き出すためのプロセスとして重要な取り組みです。

3 地域の強みを発見し新たな取り組みの開発・実践につなげる

明らかになった地域ニーズに対して、その対応・解決に必要な取り組みを考える際には、その地域社会や住民がもっている強みを生かしていくことが効果的です。そのためにはアセスメントによって、その地域の住民や環境がもっている強みを多様な視点から導き出すことが求められます。

4 地域住民の主体性・連帯性や福祉意識を高める

地域福祉実践の基盤となるのは、自分たちの地域の問題について、自分たちで解決していこうという住民の意識です。アセスメントによって導き出された成果や、住民と協働して行うアセスメントのプロセスには、地域住民の主体性・連帯性や福祉意識を醸成する効果が期待できます。

〈大井町社協　アセスメント評〉
「夢おおい未来はふくしでまちづくり
～ふくし力増強に向けた大井町最強コアメンバーの軌跡～

イイね①
調査手法を複合的に取り入れ、広く深くニーズを把握

生活上のニーズや地域活動上のニーズなどについて、3地区の全世帯を対象とする量的調査（アンケート調査）によって広く、地域団体や当事者団体を対象とする質的調査（グループインタビュー）によって深く把握する試みを行いました。

その成果として、量的調査では全体として70%の回収率となり、対象地区の住民意識の全体的な状況を把握できたといえる結果となりました。

特徴としては調査票の随所に自由記述を設けたことにより、結果として想像以上の記載が得られ、クロス集計などの量的な分析手法を多く駆使せずとも、量的な結果の背景にある要因を読み取ることが可能になりました。住民の主体性や福祉意識が高い地域に適した手法であったといえるでしょう。

質的調査では、量的調査の自由記述と同様に、当事者が感じている具体的な課題を導き出すことができたといえま

地域福祉推進を活性化させる主体性と連帯性の高い地域風土

～社協職員と地域住民との日常的な関係性が効果をもたらすアセスメントに伴走して～

す。自由記述との相違点として、グループインタビューでは対象者に対してテーマに沿った関連性のある聴き取りができているため、意味のつながりを持った具体的な課題を把握できました。

イイね② 調査の企画から分析までのプロセスを大切にしたこと

アンケートの質問項目の検討から、調査票の印刷・製本、配布・回収、回収後のデータ入力、結果の分析といった一連のプロセスにコアメンバーらが直接参加することによって、主体性や連帯性が高められたと思われます。さらには、調査の結果から得られる情報だけでなく、コアメンバー同士やかかわった協力者との関係のなかで、普段の生活では得難い様々な「気づき」が得られたものと推察しています。こうした経験が、深みのある分析や、今後の活動計画策定や活動実践につながるものであると考えます。

大井町　自称　最強コアメンバーの強み

大井町のコアメンバー 15 名は、自治会、民生委員、高齢・児童・障害分野、社会教育等から、住民の生活を広くカバーする代表者で構成されました。

打ち合わせ会では、常に、出席したメンバーの全員からテーマに沿った意見が活発に表明され、互いの意見を尊重しながら建設的に議論していく様子が見られました。これには主体性や連帯性の高さという大井町の風土が基盤にあると考えられますが、アセスメントチームの結成において、社協職員が一人ひとりを訪問し本事業の説明を丁寧に行うことによって、そのねらいや役割を明確にしていた成果もあると考えられます。

事業のプロセスの中で、コアメンバーそれぞれが、これまでの地域の取り組みでは得られなかった新たな情報を得、社協職員も含めて仲間を得たことで、今後の地域福祉の実践にも広がりが持てるようになっていったのではないでしょうか。メンバーの生き生きとした表情や意見に触れて、強くそれを感じました。

矢野ワーカーの仕事と事業の体制

アセスメントにおけるコミュニティソーシャルワーカーの主な役割としては、①アセスメントの目標を明確にすること、②目標に向けて必要な調査方法等を設計し結果の分析まで適切に進行すること、③それらの取り組みを関係者と協働して行う調整活動等を行うことがあげられます。大井町社協として特に優れていたのは③であったと評価します。

先に述べた通り、アセスメントチームの結成時に主旨説明を丁寧に行い、打ち合わせや各種作業をメンバーの意見や思いを大切にしながら一緒に進め、さらにはワーカーがメンバー共通のファイルを用意したり懇親会を開催したりしてチームワークを高める働きかけなどを行っていました。①については、調査実施のためのスケジュール的な制約があったため、目標を十分に絞り込めぬまま次の②のステップに入ることになり、当初はあれもこれもという形で議論が拡散していった感があったものの、打ち合わせを繰り返すなかで次第にまとまりを見せていきました。②のプロセスにおいては、ワーカーに調査のスキルが求められるため、不慣れな点も見られましたが試行錯誤をしながら最終的には適切な形でまとめられました。

アセスメントを活かして次のステップへ！

明確になったニーズに対して、それを解決するための活動実践の目標や方法を計画化することが次のステップです。アセスメントによって得た情報を、優先順位等を含めて改めて整理し、誰が何をどのように行うのかといったことを具体化する作業を行う必要があります。その際には、アセスメントで得た地域の強みをうまく生かしていただきたい。

また、今回のアセスメントチームのチームワークの良さを次のステップ以降も継続していっていただきたい。さらには、地域のなかでその輪が次第に広がり、アセスメント→計画策定→活動実践→評価→再アセスメントという循環が地域のなかで継続していくような体制が構築されることを期待しています。

14 協働事業の終わりに

1年間協働したことで導き出したことは

大和市社会福祉協議会

やまとボランティアセンター　所長
大矢　貴志さん

私事ですが、3月で市役所を退職し、新たに臨んだ職場が社会福祉協議会でした。最後の2年間は福祉分野の仕事でしたが、もちろん福祉の専門家ではありませんので、果たしてボランティアセンターの所長が務まるのか、若干の不安がありました。そんな中でのこの事業。地域アセスメントの何たるかも知らないまま、事務局の一員として加えてもらいました。とにかく佐川課長の足を引っ張らないように、担当職員に迷惑が掛からないように、目立たず、ひっそり月見草のように仕事をしようと思ったのですが、スウィッチが入るとつい・・・。とにかく「仕事は楽しく」という気持ちだけは課長、職員とも共有してきたつもりです。この事業を会議の中の議論だけでなく、マップや事例集の作成、鶴おん通信の発行、グループインタビュー、ミニシンポジウムの開催など、いくつかのイベントを盛り込んで進めたことが「楽しく」のひとつの要素になったかと思います。私自身も行政時代にはできなかったことを経験し、たくさんの人と出会うことにより、いろいろなことに気づかされた日々でした。

良寛和尚の辞世の句と言われているものに「散る桜　残る桜も　散る桜」という句があります。この句をどう捉え、どう感じるか。超高齢社会を迎え、多くの「老」の次には多くの「死」が現実になってきます。抗えない運命として死を捉え諦めるか、だからこそ限られた時間を精一杯生きるかは、永遠のテーマではないでしょうか。

大井町社会福祉協議会

事務局長　**野地　郁年さん**

新米事務局長として、平成28年4月に着任し、本協働事業は、社協での35年の自分の仕事を振り返る契機となりました。

「社協は事務局ではない」をある時から持論にしてきました。社協の活動は住民ニーズが基本で、そこに住民参加･住民の主体形成を図りつつ、地域課題を公私協働で解決していくものと考えます。

市町村社協は、地域課題を明らかにする王道の手法（アセスメント）を実践できる組織ではあるものの、事務局だけでは心もとなく、よこはま地域福祉研究センターの伴走支援は、実に心強いものがありました。体制的に厳しく、一人何役もこなさなければならない町社協ワーカーとして、矢野さんは非常に苦労したと思いますが、あらためて学んだことが多かったのではないかと思います。（研究センターの吉川さんが夢に出てきて、眠れない日々？が何日もあったと聞いています。）

社協とは何か、限りなく行政に近く、民間であるという社協、行政にできないことをやるのが社協という言い方も耳にします。財政的にも厳しい時代が続きますが、ここ数年の制度動向は地域づくりを課題としており、社協にとっては追い風とも言える一方、存在意義そのものが問われている大きな節目の時期です。「社協は事務局ではない」ということを芯におき、行政からの理解や市民の理解を一層得られる組織に成長していかなくてはなりません。

個々の職員の専門性・意欲を結集できなければ、社協は社協でないし、社協の使命は果たせません。今回、協議体・運動体の機能を発揮する手法として、アセスメントは有効な手段だとあらためて確信しました。しかし、これからが本番です。把握した課題をアセスメントに関わったメンバーや関係者が、更に掘り下げ、広がりをつくりつつ、行政施策とも連携し、具体的な実践、地域福祉の推進につなげることができてこそ事業の成果とすることができると考えています。

NPO法人　よこはま地域福祉研究センター

センター長　**佐塚　玲子**

よこはま地域福祉研究センターは設立5年目のNPO法人です。

目指す社会像を「しあわせ（福祉）の実現のために、誰もが可能性を追求してやまない、柔らかな心と勇気に溢れる社会」とし、学びと対話を大切に、実現のための歩みを続けています。

複雑多様化する社会において、生活課題を抱える人は全世代に広がっています。次々に新しい制度・政策が施行されるものの、課題解決は容易ではなく、専門職でさえ、問題解決の活路を見いだせずにいる様をみることもしばしばです。

しかし、そんな今日だからこそ、社会全体で、この困難を乗り越えることが必要なのだと思います。人や組織がつながり、観察力を養い、柔軟な発想を出し合って、既存の福祉に囚われない取り組みを行うとき、そのプロセスにさえ、福祉（しあわせ）があるのではないかと思います。

本事業では、柔らかな心と勇気に溢れる地域福祉に向き合う人に沢山出会うことができました。そして、そこには、地域と共に、福祉（しあわせ）を実現しようとする社協の皆さんがいました。本誌には、そのプロセス、成果を記しました。是非、多くのコミュニティソーシャルワーカーの皆さんにご覧いただき、更に対話と実践が広がることを願っています。

神奈川県社会福祉協議会

地域福祉推進部地域福祉推進担当
課長　**天野　卓さん**

本会の活動方針である「住民参加と様々な主体の協働による誰もが安心して生活できる地域づくりの推進」を踏まえて、企画、スタートした本事業ですが、これだけ幅広い住民の方々の参加による実践が行えたことは画期的だったと思います。大和市、大井町のコアメンバーと両社協ワーカーの方々が、スタート当初から率直に意見交換を重ね、アセスメントを通して地域の課題と今後の展望について取り組まれましたが、その過程における一つ一つの取り組み自体が大いなる成果と言えるのではないでしょうか。私自身、合同研修会や報告会に参加させていただく中で、コアメンバーの方々の意欲の高まり、事業終了後の達成感というものをその表情から伺うことが出来、まさに“住民参加による地域づくり”が実践されたのだと強く感じました。本会としましても、今回の成果が他の市町村での取り組みの良きモデルとなるよう、普及に努めていきたいと考えています。

地域福祉推進部地域福祉推進担当
主任主事　**小林 幸子さん**

大和市と大井町という、土地柄・規模・社協体制等の様々な環境が異なる二つの地域において、地域アセスメントを通じた「人づくり」「活動づくり」を目指した事業として実施いたしました。

最初の研修時にはコアメンバーに「？」がいっぱい浮かんでいたように思いましたが、地域でのアセスメントを通し、検討していく中で「！」に変わっていく様子を目の当たりにしました。「こうしていきたい」という住民の声がどんどん出てくるようになり、最後の報告会では主体的な「こうしたい」の声がたくさん聞こえ、頼もしく感じました。ワーカーのお二人が焦りや悩みを抱えながらも、社協局内でのチームワークを発揮し、住民と共に歩むアセスメントは、確かに「人づくり」につながっていると感じます。これからの「人づくり」の広まりと深まり、具体的な「活動づくり」を通じた「地域づくり」にも期待が高まります。私自身、本事業でのご縁を大切にしながら、県内の地域福祉推進に向けて活かせるよう精進したいと思います。

NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター

事務局　**吉川 典子**
（大井町社協担当）

住民主体の生活支援サービスをはじめとする身近な助け合い活動は、時代背景からより不可欠な状況となっています。「住民主体」は地域福祉のキーワードでもありますが、これまでは行政や社協が敷いたレールの上を上手に走る人が有能な担い手と言われてきたように思います。これからは、どんなレールをどこに向けて整備するのか、駅や分岐点はどこに作るのか？など、計画段階からゴールまで、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）と一緒に取り組む人が地域に必要となるでしょう。この事業を担当し、大井町でそんな力を持つ住民の方に多数出会うことができました。今後皆さんがどんな景色を観る旅をするのか、想像するだけでワクワクしてしまいます。意欲ある住民の力を最大に引き出す、CSW の技とは何か？より魅力ある町の創造をかなえる、町社協のご活躍を応援しています。

事務局　**福田 尚子**
（大和市社協担当）

4 月に研究センターに来て、最初の仕事が「地域福祉のプロフェッショナルに伴走する」この事業でした。アセスメント目標にした「介護予防ニーズの把握」と「社会資源情報の把握」を、『どのような手法』で『どのような時期』に『どんな人』にネゴシエーションを行い、理解協力を得てアセスメントを遂行し結果を出していくのか。佐川さんの約 1 年を追い、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）の思い、地域住民の思いを近くで感じてきました。

お互いを知ってより力を発揮できることが分かった時の、地域で活動する方に刺激を受けたと目を輝かせた時の、コアメンバーの様子を嬉しそうな、誇らしげな眼差しで見ていた佐川さんが印象的で、次にどこかの市町村社協がアセスメントを行う時、この冊子を読んで「いいね、私達もやろう。」と背中を押す 1 冊にしたいと思いました。

『人に寄り添い、人の思いを形にする』

CSW の仕事にすっかり魅せられ、大和市社協から目が離せなくなりました。

Community Social worker's Book

コミュニティソーシャルワーカーのための

アセスメント assessment

発行：神奈川県社会福祉協議会
企画・制作・デザイン：特定非営利活動法人　よこはま地域福祉研究センター
協力：大和市社会福祉協議会 / 大井町社会福祉協議会
発行日：平成 29 年 3 月